

もし夢見りあむの姉が
某眉毛みたいだったら

石田たつを

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ファツキン初投稿です。

目次

第十二話	108
第十一話	100
第十話	92
第九話	76
第八話	63
第七話	50
第六話	42
第五話	35
第四話	25
第三話	16
第二話	9
第一話	1

第十三話	118
第十四話	128
第十五話	144
第十六話	155
第十七話	168
第十八話	178

第一話

今回紹介するバンドはこちら!!

長らく下火だった日本のロックシーンを復活させ、日本中の女子高生たちの間にバンドブームを撒き降らした最強のガールズロックバンド!!

『Green・Rain』!

夢見姉妹を中心に結成されたこのガールズロックバンドは、往年のUKロックを彷彿とさせるスタイリッシュなサウンドと、フロントマンである夢見りあむの透き通るような歌声を引っさげて、このミュージック・ハウストVに初出演!

今日はどんなパフォーマンスを披露してくれるのか!?

『Green・Rainの夢見りあむがパラッチを攻撃!』

『夢見りあむ、またまた暴走！悪質なファンの胸ぐらを掴む！』

『ガールズバンドの悪童りあむ！ステージ上で飲酒と喫煙！』

『夢見のえる爆弾発言！765プロに宣戦布告！？』

『夢見姉妹の最強悪童伝説!!りあむ語録編』

『夢見姉妹の最強悪童伝説!!のえる語録編』

色々な事があった。

ガキの頃からロックを聴いて、暇な時にギターを弾いて、そこらへんのしょーもないバンドのローディーをやって、ラジオから聴こえる曲をギターで弾いてみて、ハツパもやって、キメながらギターを弾いて、気に入らない奴らはみんなぶちのめして、サツにパクられて、日本に来て、そこでも気に入らねえクソ野郎どもをぶん殴った。

本当に色々な事を行った。

だが、そのどれもが俺を満足させてくれなかった。

いつも何かを探していた。

俺を満たしてくれる何かを。

そしてそれがようやく分かった。

全ては運命なんだ。

クソマスケな妹
りあむと共にここに立つのも。

「よく来たなクソつたれ共オーツ！盛り上がってるかポケーツ！」

武道館が揺れる。

遅れて、歓声が頭の中で滝の様に溢れる。

轟く熱狂の嵐の中で、俺は立っている。

横を見ると、りあむホが仁王立ちで、ポケツとしてやがる。

まあ無理もない。

デビューしてからしばらくずっとクソ狭いハコでライブして、クソみたいな番組に出て、バカみてえな雑誌でボロクソ書かれて、クソアホしかいねえSNSで話題（悪い意味で）になってた俺たちが。

そんなしよーもないちっぽけなバンドだった俺たちがだ。

I s t a l バムが飛ぶように売れてからちよつと時間が経てば、このクソバカでっけえライブに立つちまうんだからな。

今までの小さなハコなんか比べもんにならねえ。

だから人生は面白い。

俺は今生きている。

間違いない、今なら神にだって中指を立てられる。

「のえるお姉ちゃん……ぼく吐きそう……てか吐いちやう……むり……やむ……やむやむyumだよ(?) ……ああああ!!なんでこんなに盛り上がっちゃってるのおく!!?」

……ああクソつたれ……折角浸ってたのに……後でぶっ飛ばしてやる……

ぼくは、元はアイドル部門に所属していた。

毎日トレーニングルームで、歌とダンスのレッスンを外が暗くなる（……ごめんちよつと盛った）までしていたけど、歌いながら踊ると、右に重心がズレて、体のバランスが取れずにふらついてしまう癖があったから、なかなかダンスが上達しなかった。

事務所のみんなはいつもキラキラしたアイドルで、ぼくみたいなヤツが敵うはずないって思ってたけど、それでも彼女たちに一歩でも近づくためにしていた自主レッスンは、……いや、たしかにめんどくさいしダルいし足痛いしなんか変なところの筋肉も痛かったけど、嫌いじゃなかった。Pサマも褒めてくれたしね。

でも、そんな中々芽が出なくてもある意味リア充していた時間は、すぐに消え去ってしまった。

第8回シンデレラガール総選挙、忘れもしないあの忌々しい5月20日。

ぼくはアイドルになってから、僅か102日後に総選挙で第3位になってしまった。

理由はもちろん分かっている。

オタク共の悪ふざけだ。

大方テレビ（ぼくの初仕事だった：てか事務所に所属してからこんなにすぐテレビ出れちゃう346プロやべえ）で、台本を無視して暴れてるぼくを見て、面白半分で票を入れたのだろう。

掲示板に張り付いてるオタクくん達は、国民的アニメの人気投票とかで、マイナーなキャラに大量に票を入れる様な連中だ。正直予想してない訳ではなかったんだよね。

……………いやいやいや本気出しすぎだろオタク共！ぼくのことすこるとかってレベルじゃねえぞ！

おかげ様でぼくはネットで炎上するわ、なぜか仕事は激増するわでんやわんやになっちゃった。

バラエティの仕事はまだよかった。テキストになんか言つとけば大体ウケたし、カワイイアイドルが隣に座った時なんかテンション爆アゲだった。

でも、音楽番組とライブはかなり堪えた。

昔から歌には自信があつたし、ちゃんとレッスンも積んできたから下手くそな歌声を全国の皆サマに晒すハメにはならなかったけど、とにかくダンスがヤバかった。ヤバすぎてライブの度にやんでた。

Pサマが割と本気で焦るくらい病んでた。

ぼくの名前が売れるたびに増していく重圧が、次第に心を蝕んでいったんだと思う。いつもやむやむ言ってるけど、あの時は結構マジで病んでたのかも。

ぼくはアイドルを辞めるつもりだった。

こんなぼつと出のぼくがテレビに引つ張りだこで、地下アイドルとして何年も頑張ってる子が日の目を浴びないまま辞めていく現実に嫌気がさしていた。

でも、こんなぼくのために毎日頑張って仕事を取ってくれるPサマに辞めたいなんて中々言えなくて、それからズルズルとアイドルを続けてしまった。

総選挙の日から3週間後、今勢いのあるぼくを中心としたユニットを組んで、CDデビューをするのはどうだ？ってPサマに言われた。

……今思うと、ここがぼくのターニングポイントだった。

2019年某月。

346プロダクション所属である夢見りあむ、ライラ、涼宮星花、木村夏樹らをメンバーとしたガールズバンド、『Sligh t・Rain』にとある変化が訪れた。

夢見のえるの加入である。

後に『Green・Rain』と名前を変え、日本中にその名が轟くことになることをまだ誰も知らない。

第二話

ぼくはかつて『Sl i g h t・R a i n』というガールズバンドユニットのボーカルだった。

ボーカル担当だった理由は、ユニットのメンバーはぼく以外みんな楽器経験者だったから。

夏樹ちゃんはエレキギターをギューンギューン鳴らしててやばやばだし、ライラちゃんはドラムをぶっ壊すくらいの勢いでドコドコ叩くし、星花ちゃんがベインベイン鳴らすベースはメトロノームくらいリズムが精確。

そんなハイクオリティな演奏の中、ぼくがやる事はただ歌うだけで、ダンスも必要なツシングという半分社内ニート状態だった。

ちよつとした気休めに、カラオケで置いてありそうなやつすい赤いタンバリンを買った。

ユニットを結成してから、メンバーと顔合わせして、委託した楽曲を数曲練習していると、結成から僅か数日でとつてもちつちやいハコだけど、ライブをすることが決まった。

Pサマ曰く、もしこのライブが成功して仕事が増えていけば、CDデビューも目の先の先らしい。

「やったなりあむ！アタシたちの実力見せてやろうぜ！」

夏樹ちゃんは最初はリーゼントにビビったけど、ワイルドなのに優しい笑顔で、いつもぼくに元気をくれた。

「ライラさんもがんばるのですよー」

ライラちゃんは可愛いくておっとりしてるのに、実は意外と中身がロックで、ぼくによく構ってくれた。

「わたくしワクワクワクワクしてきましたわ〜」

星花ちゃんはお淑やかで、それでいて芯があつて、そんなもってよく美味しい紅茶を淹れてくれた。

この時が人生で一番…いや、二番目に楽しかった。

みんなとおしゃべりして、レッスンして、たまに帰り道で王〇の餃子を食べる。

こんな日が毎日続けばいいと思ってた。

でも、現実はその上手いこと行かない。

そう、このユニットとしての初ライブが運命の日だった。

俺がまだ21だったころ、ローディーをやつてたバンドで喧嘩した。理由は何か忘れたが、あんまりにもムカついたからバンドのメンバーを全員ギターでボコボコにしてやつたのは覚えている。

幸いにも訴えられなかったが、やつぱり仕事は失った。

そこからしばらくフラフラしていたが、ある日何となく近所のライブハウスに行く
と、長らく音信不通だった見知った顔がステージに立っていた。

夢見^アりあ^ホむだ。

最初は冷やかすつもりでライブを観ていたが、俺の心は次第に惹かれていった。

ギターも中々上手いし（俺ほどじゃないが）、リズムも安定しているし、何よりもりあむがかなりカッコよく見えた。

おいおいマジかよ!?!こんなところにチャンスが転がってるじゃねえか!!
そう思った。

初ライブ終えてからしばらく経ったある日……えーっと、たしかリーゼントがあんまりキマツてなかった日だったかな？

朝から若干イラつきながら、二人仲良くラジオ体操してるライラと星花を尻目に、一人静かにスタジオの隅で練習前に相棒ギターのチューニングしている時だった。

Pさんが見慣れない人を連れてやってきた。

よりによってこんな日にお客さんかよ……つてげんなりしながらお客さんの顔を見るとビックリ！黒髪のりあむだった。

しかしどこかおかし、りあむにしてはタップがある（てかアタシよりデケエし！）し、何より胸が全く無かった。

たぶんライラも星花もビックリしてたと思うぜ。あんまりにも顔がそっくりだったからな。

ぽかんとしてるアタシたちを一瞥すると、りあむ似のお客さんはやたら不機嫌そうに呟いた。

「りあむはまだ来てねえのか？」

「そういえばりあむが居ねえ、まあアイツは割と遅刻が多いタイプだったから、今更腹が立つわけでもなかったが。」

「たぶんこのお客さんは、りあむの姉貴だろう。」

「大方弁当でも届けに来てやったのかな？なんて思っていると、いきなり爆弾発言しやがった。」

「まあいい、今日から俺、夢見のえるがこのバンドを仕切る。とりあえずお前ら新しい服と靴を買ってこい」

「流石にカチンと来たね。」

「ライラと星花はまたもやポカンとして言葉が出なかったみたいだけど。」

「でも、いきなり現れて好き勝手言いやるもんだから、ついつい喧嘩腰で対応しちまった。その高い高い出鼻を挫いてやろうと思ってるね。」

「へえ？アンタ、いきなりやってきて随分偉そうじゃないか、どつからそんな自信が湧いてくんだい？」

「こう言うのと、りあむの姉貴：いや、夢見のえるは不敵な笑みを浮かべながらこう言った。」

「俺は曲が書ける。それもとびきりイイ曲をな」

「のえるは背負っていたリュックとギターケースを降した。」

「俺がお前らを必ず億万長者にしてやる。だから俺についてこい」

その時初めてののえるの眼をちゃんと見た。

まるで砂漠オアシスの泉のように綺麗で、それでいて力強い瞳だったのを今でも覚えている。

だからかもね……のえるのビッグマウスを不思議と信じる気になった。

「そこまで言うなら、アンタの曲聴かせてみな、納得のいくモンなら文句言わねえよ」

のえるがギターを取り出したその時、ようやくりあむが現れた。

「おはようございん!? おおおお姉ちゃん!」

りあむはエorosミススのステイオン・タラークらしい口をおつきく開けて飛び上がった。そんなのでそのままカチカチに固まっちゃった。

漫画みてえなりアクションしてんな。

さつきから黙って見てたPさんも、流石に小声で「うおっ」って言った。後でその

事をいじったら、結構本気で恥ずかしそうにしてたな。

「ナイスタイミングだぜアホ、それじゃあ今から一曲聴かせてやるよ」

思わず生唾を飲んだ。

夢見のえるの顔つきが変わったからだ。

まだギターを弾いてもいねえのに、まるでこの場の支配者みてえな威圧感で……無意識に身体が強張った。

どんな曲を聴かせてくれるのか……そんな期待が最高潮に達した時、星花が言った。「あの……一ついいでしょうか？」

のえるはすつつつごい不機嫌そうに答えた。

「何だよ……」

ぐううううと気の抜けた音が、スタジオに鳴り響いた。

「で、ティータイムに……朝のティータイムにしてもよろしいです……か？」

「ライラさんもコーヒーが飲みたいのですよー」

……いや二人ともマイペースすぎだろ。

てか、りあむはいつまで固まってるんだ。

夢見のえるの登場で場に緊張感が生まれたと思ったら、結局いつもの感じになっちゃった。

のえるはだいぶ真剣な顔でアタシに言った。

「……なあ、俺……もしかして早まったか？」

ごもつとも。

まあ、アンタもいずれ毒気を抜かれるだろうよ。

アタシたちを率いるってんならな。

第三話

(りあむの日記：p125『2019年6月15日』より一部抜粋)

ぼくは流れに乗らなきや

ぼくの時間を過ごさなきや

ぼくの言葉で言わなきや

誰もぼくの道に入れちやいけない

ぼくが持つていくには多すぎるから

ポーつとしちやいけない

ダメ出しされちやいけない

ぼくがなりたかつた人になりたいんだろ

ぼくと一緒に来るのなら

何かを失った気がしている

ぼくを連れ去つて隠していく

留まつてはいられない

わかるんだ ぼくの人生が進んでいく道が

ぼくを内に滑り込ませる鍵を見せた

向こうに隠れていない彼女に

わかるだろう ぼくは君に気づけると思うよ

一度も会ったことがなくても

ぼくは流れに乗らなきや

ぼくの時間を過ごさなきや

ぼくの言葉で言わなきや

誰もぼくの道に入れちゃいけない

ぼくが持つていくには多すぎるから

何かを失った気がする

何かを失った気がする

何かを失った気がする

review!

割と悪くないから勝手に使わせてもらうが、一つ文句がある。ぼくぼくうるせえんだよ！何回書いてんだ！木魚かてめえは！

俺が加入してまじやったことは、バンド名を『Green・Rain』に変えたことだ。

名前を変えたこと自体には特に意味はない。ただ俺はバンドの全てをコントロールしたかったんだと思う。だから変えさせたって訳だ、文句あるか？

こんな俺を見て、年下相手にいったい何を威張り散らしてんだと思うだろう。しかし、俺は奴らの実力と才能を間近で見た。

色々とかく言ってるのも、俺が奴らと対等であるということを内心で思っていたからだ。じゃなきや年下のガキ相手に色々口出しするなんてダサイ事できねえだろ？

これでも認めてんだぜ奴らを。

まず、りあむはブッチギリで歌の才能を持っていた。あのアホは、メンタルがクソザコなどこ以外は、まるで神に愛されている。よく考えれば、あいつは炎上での知名度上昇という（まあかなり邪道な）方法で、わずか102日で総選挙3位になった。悪運と幸運の二つを常に持ち歩いているようなヤツだ。

あいつの欠点は、あのクソだつせえ赤いタンバリンを全く叩かない事。マジでなんのためにいつも持つてんだよ。

あと深夜に黒歴史100倍濃縮ポエムを、わざわざ日記に書いてる事。まあ意外と悪くはないから、りあむが事務所の仮眠室で寝てる隙に何枚か写真に納めた。あとはこれを英訳すりや歌詞の完成だ。りあむはアホだからたぶん気づかねえだろ。

次に夏樹、アイツはギターの巧さと、メンテのメメさはまさに仕事人って感じだ。

練習の時も余計なことを言わねえし、公私のメリハリがしっかりしてるから、何かととつつきやすい。バンドに加入したからといって誰かと馴れ合うつもりはなかったが、夏樹はマジに良いダチになれたと思う。

ちなみにこいつの欠点はバイクの趣味が悪いつてとこだ。やっぱホ○ダが一番だろ。

ライラはまだ16のガキのくせに、やたらパワフルなドラミングをしてるもんだからビビった。最初は、いつもコーヒーばっか飲んでやがるただのカフェインジャンキーだ

と思つてたが、どうやらこいつの本当の正体はアイス（ヤクじやねえぞ）ジャンキーらしい。ちなみにオキニはガリガ〇君のソーダ味だそうだ。クソどうでもいいな。

練習の合間に軽く話してみたが、どうやら中々のロッキンロールスピリットの持ち主だ。特に親父に反抗して日本に飛んできたって話はグツドだ。

ドラマーはバンドのエンジンみてえなもんだから、あんまりお腹冷やさねえようにと言つたら、何故かニヤニヤしてた。欠点はたぶん頭がイッチまつてるってところか。

涼宮星花はりあむとは別ベクトルのアホだ。そして生粋の紅茶ジャンキー。あとイギリスかぶれだ。こいつはベース担当なのに私物でやべえ額のバイオリンを持つてやる。たぶんブルジョワなんだろうな、吐き気がするぜ。だが演奏自体はそんなに悪くないし、割とお高めで美味しい紅茶を淹れてくれるのは好印象だ。

欠点は無駄にお上品な所。ロッキンロールに品は要らねえ。

あと私服がワンピースとか、そういう小綺麗なモンしか着てなかったから、古着屋で適当に見繕つてやった。ちよつとした出費だが、まあ必要経費だ。感謝されるのは悪い気分ではないが、ペコペコすんのはやめて欲しい。

気に食わねえヤツが居たら、即刻クビにしてやるつもりだったが、案外悪くない奴らだった。

何日か練習すれば俺の曲をマスターしたし、レッスン漬けでもモチベーションが落ち

ない。根性のある奴らだ。

三曲程出来るくらいになつた時、俺はプロデューサーを一走りさせて、どつかのちつさいライヴハウスの、オープニングアクトの仕事をもぎ取つた。そこで三曲やつてみて、俺様がみんなを最終チェックをするという計画を実行した。

ライヴの結果だけ見れば、客はあんまり盛り上がりなかつた。当たり前だな、だって全部英詞だもん。

しかし手応えはあつた。

なぜなら、みんな目立つたミスはしなかつたし、りあむに至つてはいつもの練習通りの、最高のパフォーマンスを見せてくれた。

練習と同じだけの結果を出せるヤツがこの世にどれだけいるのか？

だからりあむに言つた。

「ナイスだ、りあむ」

つてな。

わたくしのご主人様であるライラ様は、故郷のドバイでよくお父上にお見合いを勧められていました。

ライラ様のお父上は、ドバイでは珍しい敬虔なイスラム教徒で、シヨツピングモールで可愛いお洋服を買ったり、独学で日本の文化や言語を勉強していたライラ様をよく叱りました。

ライラ様は義務教育を終え、あの家の中で唯一ライラ様に理解があつたお母様は、わたくしと共にこの極東の国日本に逃がしましたが、なにかとお金に困つて住居を転々としたり、わたくしは日本語が分からなかつたりして、大変困り果ててました。

しかし、ライラ様はプロデューサー殿に拾つていただき、アイドルになり、お友達もたくさんできました。

最近同じ事務所の子とユニットを組み、ますます仕事に精を出すようになってからは、ライラ様は事務所の女子寮に住んでいらつしやるそうで。

なので、今のわたくし一人には、このアパートは広く感じてまいりました。しかし、最近わたくしはある悩みがございます。

ライラ様は最近、頑張りすぎています。

どうかご自愛ください。わたくしは何があつても貴女の味方でございます。

C!ニュース

2020年2月21日16:40配信 どるらぼ

『今ライヴハウスで密かに人気の謎のガールズバンド、『Green・Rain』の正体とは?』

今ではすっかり下火になってしまったバンドブーム。しかし、最近では復活の兆しが見えている。

2019年に結成された、ライヴハウスを中心に活動するバンドアイドルグループ『Green・Rain』。

所属はなんとあの大手芸能事務所である346プロダクション。

しかし、彼女たちはそれを無闇に吹聴しない。

「俺たちの音楽が、大手事務所の物だと思つて欲しくないからだ。」

そう語るのはリーダーである夢見のえるさん(24)。

彼女は大手芸能事務所のゴリ押しに頼らず、まずはライブハウスで修行し、それから徐々に知名度と活動を増やしていく方針を取るそうだ。

情熱を燃やす若きバンドルが、再び日本のロックシーンを復活させる事が出来るのか？今後の動向に注目が集まる。

第四話

(りあむの日記：p110 『2019年6月1日』より一部抜粋)

引き返そう ぼくの持っているものを全てを投げ出して

今日 トップから転落した

夢を見ている お前らの言ったこと全ての

今 お前らはどこにいるんだろう

ぼくを抱きしめてくれ 世界中が寝静まっているうちに

お前らが必要だ ぼくをノックアウトしたんだ

夢を見ている お前らの言ったこと全ての

「そんな話をしないで！」と言われた

滑り込む 一緒に飛べない

祈ろうとしている

だけどわからないんだ お前らが何を言ったのか

ぼくは道を見つけたんだ

輝きを追い求める道を

ただ一人でいさせてくれ

朝になつても ぼくはやることがわからない

ぼくは道を見つけたんだ

ぼくがしていることをするための

ただ一人でいさせてくれ

ぼくは引き返せるんだ

引き返せるんだ

r e v i e w !

こりやまた中々の出来じゃねえか、まあこの歌詞で売れたらお前もデカイ家で一生食っちゃ寝できたんだ、許せ。

b y N o . 1

P S 実はこれ、お前のポエムの中で一番お気に入りかもしれない。

結成からしばらくの間は、ひたすらにレンタルスタジオでの練習と、ちよくちよくとライヴハウスでオープニングアクト（よーするに前座だな）の繰り返しだった。

プロデューサーは、いい加減デカイ仕事をやらせたがっていたが、俺はその意見を問答無用で封殺した。

なぜなら、俺の曲のストックはまだそれほど無かったし、りあむと夏樹以外のアイドル上がりの連中は、アマチュア以上プロ未満の演奏スキルだったからだ。（最も、星香は舞台慣れしていたし、ライラはかなりマイペースな性格だから、場数を踏んでメンタル面を鍛える必要は無さそうなのが幸いだった）

だから、いきなり仕事を増やしたくなかった俺は、あくまで徐々にバンドを成長させていく方針でやっていた。

色々と話し合った後、これまた結構時間をかけて近所にある小規模かつすぐに出演できる小さいハコに軒並み出演した。

それで、そろそろ活動の幅を広げようか話していた時、まるで見計った様にプロデューサーが、割と大きいライヴハウスで対バンする話を持ってきた。

どうやら、元々出演するバンドのメンバーが、急遽出れなくなってしまったらしい。

(なんでもボーカルの奴が酒焼けでノドがガスガスになり、ギターの奴はそれが原因でボーカルと殴り合いの大喧嘩をして、ボコボコにされて入院したらしい。……アホだなマジで)

そんな訳で、俺たちを何度か見てチェックしていた主催者が、代わりにプロデューサーに電話で頼んできたとの事。色々目まぐるしく前座しまくってたからこそ、降るべくして降ってきたばた餅って訳だ。相変わらず、俺は幸運を見つけるのが上手いらしい。

しかし、この話は確かに滅多にないビッグチャンスだが、幾らか懸念点もある。

まず、今までやってきた前座みたいに、1〜3曲やってハイお終いつて訳ではないという所だ。デカイ所でライブをやるからにはある程度の実力と、たくさん曲のストック、そして最後までクオリティを落とさない集中力が必要だ。

うちはこの集中力が未知数だ。まだまだ俺たちは大きいライブをしていないし、特にあむは実力はともかく集中力に不安がある。あとメンタルもだいぶ。

次に、ライブ当日は今から1週間後という事だ。今まで以上にミスやトラブルは許されないのに、練習期間がやたら短い。

オマケにそのライブハウスは事務所から割と遠いから、移動に時間がかかる。

だから俺たちはバンドの未来を懸けて、地獄の様なレッスンに打ち込ま……………

なかった!!!!!!

そりやぞうだろう？俺は後にロックスターになる女だぜ。

やばいやばいやばい時間ないよ練習しなきゃピエーンなんて、甘ったれたクソガキみてえな事言いながら、焦りまくるなんて真似はしない。まあありあむは言ってたし、めっちゃ焦ってたけど。

どんな時も冷静で、しかめっ面で、真っ直ぐに前を睨みつけ、邪魔する奴はぶっ飛ばす。それが俺の生き様だ。

常々ありあむには、俺の様なロックンロールスピリットが必要だと思っていたから、このタイトなスケジュールとデカいライブを機に、アイツのクソザコメンタルを一皮剥けさせると言うプランを立てた。

所で話は変わるが、アイツは今20歳だ。なのに酒もタバコもやってねえ。どれか一つは後学のためにやるべきだと思うんだが。……ん？話が変わってないって？まあ予想はつくよな。つまりそういうことだ。

2020年4月14日。『Green・Rain』で初めてのそこそこデカめのライブをした日。

リハを終え、もうすぐ本番が始まるって時に、のえるお姉ちゃんは楽屋に入ってきて、いきなり缶ジュース（ロング缶）を豪速球で投げてきた。

案の定おでこにガッツリぶつけられた。

ちよつと涙目になりながらも、お姉ちゃんからの差し入れ（激レア）の缶ジュースを飲もうと……………いやこれ、缶ジュースじゃない。

「ストロ○グゼ○じゃんこれえ!？」

お姉ちゃんは真顔で

「飲んでから来い」

って言った。

……………

「はあく!？」

するとまたもや真顔で

「やむくらいならのむ。…これ名言だな」

何言ってるの？（素）

「じゃ、そういって」

……

どうなつてんだよ頭!?! バカじゃないの!?! バカを超えたバカなの!?! 死ぬの!?!

こんな飲んでステージに行ける訳ないじゃん!! てかここにぼくたちが呼ばれた理由もどつかの酒焼アホバンドの代打なんですよ!?! その代打のバンドのボーカルが酔つてステージ上がるつてどう考えてもおかしいですよ!?!

そもそもぼく20歳になつたけどまだお酒飲んだこと無いし!

うおっ!?! P、Pサマ! タバコ休憩からナイスタイミングで帰ってきた!! これ!! お姉ちゃんが飲めつて!! やばくない!?! ぼくこれでも一応アイドルなんだよ!?! マジで!!

……… Pサマ? え? …… 飲むの? …… 何を? ……

これ?

わたくしにとって、このライブは特別な日でした。

きつとお父様とお母様が見ていたら、とてもびっくりしてしまおうと思いますが。

初めてバイオリンのコンサートに出た時のこと、初めてアイドルとしてステージに立った時のこと、初めてベースに触れた時のこと、初めてライブハウスで演奏した時のこと。

その全てがわたくしにとって特別な思い出で、その全てがわたくしに勇氣と希望を与えてくださりました。

クラシックの柔らかく、優雅で、人を癒す力を持つ音楽と正反対の音楽、ロック。

ロックは力強く、激しく、人に勇氣と力を与えてくれる音楽。

その本質をようやく実感できたのがこのライブでした。

わたくしたちが奏で、りあむさんが歌い、そして次第にお客様の目はキラキラと星の様に輝く。やがてその輝きは波紋の様に広がって、ライブハウス全体が大いなる力に包まれて、高鳴る胸の鼓動が止まらなくなりません。

のえるさんの作る曲はどれも開放的で、挑発的で、悪魔的で、どこかふてくされていく様な、それでいて力強さを感じる曲です。

そしてその曲をわたくしたちが奏でる。

まるで想いが一つになるようで、わたくしも開放的になってしまいます。

わたくしをここまで連れて来てくださったのえるさんには、本当に感謝しています。最初はちよつと怖い人なのかもしれないと思いましたが、……その……淑女として恥ずかしい……アクセントもありましたが……うう……今でも恥ずかしい……

ですが、このユニオンジャックTシャツもプレゼントしてくださりましたし、表にはあまり出さないようですが、とつても親切で、優しい人ということが分かります。

このバンドで、もつと新たなわたくしの『音色』が見つかる気がします。そう考える
とわたくし、とつてもわくわくしてきましたわ♪

そう、わたくしにとってこのライブは、新たな音楽の境地にたどり着いた特別な日です。

……そういえば、りあむさん、ライブが終わった後すぐにどこかに行つてしまいましたか……どうなされたんでしょうねプロデューサー様……プロデューサー様？え？いえ、わたくし皆目見当もつきませんが……

「オ、オ、オ、エ、エ、エエ〜…ぎ、ぎぼぢわゝるゝいゝ〜お、お、ね、え、ぢやゝあゝんゝ」

「H A H A H A ! りあむ ! お前中々根性あるじゃねえか !! 」

「のえる ! 笑ってる場合かよ ! ほら早くトイレ行くよほら ! 」

「リアムさん、大丈夫でありますか ? レジ袋持つてきましたですー」

「あつ、皆様ここに…!!? ……い、一体どういう状況なのでしょうか ? 」

第五話

分かりやすく例えるなら、デツケエ崖を転がり落ちる車だ。それも軽自動車みてえなしよぼい車じゃない。○ールス・ロイスレベルの高級車さ。そいつが火を吹いて、バンパーやボンネットを撒き散らしながら、いつか来る終わりに向かつて時速120kmで突っ込んでいる。なんの話かつて？俺たちのことさ！そう、俺たちは崖を転がり落ちる車。ブレーキはぶっ壊れ、ハンドルも効かず、目の前は海。それが俺たちだ。

人間つてのは最初は正しい道を歩む。免許取ったばかりのやつも最初はちゃんと法定速度を守つて走る。

だがいずれ道を間違え始める。そして、引き返すなんてダサイ真似したくない！なんて言いやがるアホ共は、そのまま突っ走つちまう。そこでその内速度なんて気にしてられなくなつて、オーバートップギアで走り続ける。んで事故る。どこの世界でも若い奴らつてのはこんなもんだ。

俺たちだつて例外じゃない。

あのライブを何事もなく（大嘘）成功させたぼくらは、いよいよデビュー・シングルの作成に取り掛かることになった。しかも、うちの事務所の録音スタジオで。

そういうえぼく、あんまり事務所に行つてなかつたな……レンタルスタジオがもはや実家みたいになつちやつてたし。

てか今更だけど、事務所に録音スタジオあるつてヤバくない？ やつぱりマネー・イズ・パワーじゃん？

そんなこんなで珍しく朝から夢見姉妹二人で仲良く（？）事務所に來てるわけだけど、どうやら今日のお姉ちゃんはご機嫌斜め35。こういう時は、黙ってさっさと歌詞カードをガン見しながら言われた通りに歌うのが一番！ たまーに顔をチラ見するけど、やつぱりいつもよりしかめっ面。ひええ。

お姉ちゃんは、いつもぼくの繊細なハートにキレッキレのナイフをグサグサ刺してくる。でも、ぼくが歌つてる時は違う。お姉ちゃんはいつも死んだ魚みたいな目をしてるけど、その時だけは違う。まあぼくのザコメンタルみたいにまたすぐに死ぬけど。

お姉ちゃんはぼくをすこつてるのか、それとも実はぼくのアンチなのかは分からない

けど(ぎ、流石にないよね?)、でも、ライブでぼくが歌い終わった後はいつもこう言ってくれる。

「ナイスだ、りあむ」って。

……やっぱぼくすこられてね?それどころかもう完全に推されてるよね!? ああー見せちゃったかあー、あの常時激おこ変態ギタリストお姉サマすら虜にしてしまうなんて…ぼくって天性のアイドルかも!?! よ!

…あれ?でも待って!!

アイドルっていつても、最近のぼくあんまり歌って踊ってないじゃん!これじゃ歌って踊れる本能寺から、歌う本能寺になっちゃうじゃん!…はあくめっちゃやむ…

あー、でもその分ダンスのレッスンしなくていいじゃん。やっぱラッキー!

えっ?あつ、もう全部歌った?おっけーおっけーおっけーおっかれー……………お姉ちゃん無言で帰ってた……………

一言もりあむちやんを褒めずに…ただただ真っ直ぐに帰ってた……め、めっちゃやむ!!

いいもん!○将でぼっち餃子パーティーするもん!もうお昼だし!この後練習まで時間あるし!うううく

「リアムさんーお疲れ様でございますー」

っ!?ライラちゃん…!

ああ今日もお顔が良い…ッ!髪サラサラ…ッ!尊っ…!

「これからお昼でございますか? わたくしも一緒に食べますですよ」

は? 天使かよ

「ライラちゃん…すこ…」

ライラちゃん…すこ…マジ推せる……てかマジで顔が良すぎでしょ、褐色金髪口りで優しくてドラムできるとか、おいおい神はぼくにこの子を推せと仰ってるな? 推すに決まってるんだろお!? てかぼくをお昼に誘ってくれる激カワ(ここ重要)アイドルって時点で必要十分条件満たしてるんだよ—!

「う…ありがとうございます—」

よ—! りあむちゃん今から餃子いっぱい奢っ……ッ!? いや、待て待て待て、落ち着け天下の炎上女王りあむちゃん!! こんな可愛い可愛いライラちゃんのお昼ご飯が油ギトギトの餃子なんかで良いのか!? ダメ、ゼツタイ。

ここは勇気を出して、ライラちゃんが何を食べたいか聞くんだ…ッ! それ在必勝法…ッ!

「ラ、ライラちゃんはな、何食べた…い?」

い、言えたッ! キョドらず(当社比)に言えたッ! パーフェクトコミュニケーション

だッ！やったぜぼく！

「フリード野菜と鶏肉をパンと共に煮込むドバイでは有名なアラブ料理が食べたいですー」

…なんて？

デビュー・シングルの作成には中々苦労した。まず、俺たちの一番の武器であるライヴのノリをどう上手く引き出すかが、めっちゃめっちゃしんどかった。今までかなりハイペースかつ、濃密なスケジュールでライヴをしまくったおかげで、みんなの演奏スキルには何の問題も無かった。

だが、…録音スタジオなんかでアドレナリンが出るか？客0人なのにアドレナリンが

ドバドバ出る奴なんてのはジェ○ソン・ステイ○ムくらいだつてんだ。

色々試行錯誤して、なんやかんやで何とか予め組んでた（というよりプロデューサーに組まされた）予定通りに完成した。

その後、音楽番組でゲストとして出演する仕事を貰った。

番組名は『LET'S SAY "HELLO"!』たしか新人アーティストの登竜門と呼ばれている。：クソどうでもいいな。

俺たちはこの番組で1曲やった後、デビュー・シングルを宣伝するって寸法だ。

ちなみに、この中じや俺だけが初テレビだったわけだが：みんなよくこんなのやってたな？マジでクソしょーもねえ。どいつもこいつも台本読み上げプログラムかよ。司会の古いぼれもジェー○ズ・ボン○の敵役みてえな見た目のくせに、やれ好きな食事もんだの最近ハマってることだの聞いてきやがって。もう頭ボケてんのか？クソフルコースだったぜ。

だから歌い終わった後に、言ってやったんだ。

「俺たちのデビュー・シングル『Super High Speed』は5月10日販売だ！音楽アプリでも配信するからよろしくな！」

「いやあく見事な演奏でした！では、最後にリーダーののえるさん、一言どうぞ」

「ああ〜そうだな…オッホン…テレビの前の諸君！」

「おおっ！さあさあテレビの前の皆さんご注目！さっ！のえるさんどうぞ！」
「必ずコンド（ピー）ムはつけるよ！」

○chでめっちゃバズったらしい。
やっただぜ。

第六話

「Super High Speed」は、2020年にGreen・Rainが発表した楽曲、及び同曲を収録したシングル。デビュー・シングルである。

「Super High Speed」

Green・Rainのシングル

リリース 2020年5月10日

ジャンル ロック

レーベル Jコロムビア

作詞作曲 夢見のえる

プロデュース Green・Rain、武島健治

収録曲

1. Super High Speed

2. Abide

3. Columbus

4. Queen of Rock, N, Roll

デビュー・シングルにも関わらず、結成したてのバンドルとは思えないクオリティの高さや、夢見姉妹の奔放な言動から販売前から注目を浴びており、初週でオルコンシングルチャート13位に食い込んだ。

毎日ファツキン大忙しだ。

俺たちのクソプロデューサーこと健治P（24歳たぶん童貞）の野郎…あいつマジ許さねえ…あの野郎今までプロデューサーらしいこと出来なかった反動からか、めっちゃ仕事持つてきやがる。

音楽番組、ラジオ、ミュージックビデオの撮影、雑誌の取材、ハコで対バン、2枚目のシングルもその内収録する予定らしいし、まだ詳細は未定だが、ライヴハウスでワンマンライヴする予定も組みやがった！アイツなんか全体的に日程押さえるの早いんだよ！

マジありえねえ！ファック！こんなに忙しいとゆつくり晩酌もできねえじゃねえか！クソツ！！

あの野郎調子に乗りやがって…仕事場じゃなきやライラに「健治殿♡」なんて呼ばせてやがる（…呼ばせてるんだよな？）し、りあむに至ってはなんか普通に「Pさま♡」呼びだ。なんだ？そういうプレイなのか？クソがよ…んで星花は論外だ。あの目！なんだよあの目！もう完全に恋してるじゃねえか！マトモなのは俺と夏樹だけじゃねえかチクショー。

まあいい、バンド自体は上手くいってんだ……。

おっと、そういうえば最近妙な噂を聞いた。何でも今日本はガールズバンドブームが来そうな雰囲気らしい。健治Pがクソキモいニヤケ面で言ってた。ぶつ殺してやろうか

と思つたぜ。

だからライバルもその内出てくるかも、なんて言つてやがったが、そんなのは問題じゃない。邪魔するなら真つ向から叩き潰すのが流儀。このままの勢いを貫いて、ロックスターの頂点に君臨するのが今の目標だ。

しかし、最近とある問題が出てきた。それはりあむがアル中になりかけてやがることだ。だいたいどのライヴでもストロングゼ○のロング缶で水分(?)補給するわ、それで泥酔してマイクスタンド持つてマ○イ族みてえにびよんびよんするわ、タンバリンどっかにブン投げるわ、なんか意味わかんねえ事言つて客に絡みだすわ、なぜか演奏中の俺にセクハラするわで、ああもうめちやくちやだよ(憤怒)。

りあむは独特なボーカルスタイルだ。手を後ろで組み、右肩を下げ、上半身を仰け反らせながら仁王立ちで歌う。どうやらこれはもう生まれ持った癖らしい。まだアイドルになりたての、歌つて踊つてた時期、徐々に重心が右にズレていったせいで、トレーナーから鬼の特訓を受けたそうだから筋金入りだ。お前アイドル向いてないんじゃない? (辛辣)。天性の歌声と顔と無駄にデカいおっぱいが無ければ即死だったなマジで。てかマジであいつなんなん? 何であんだだけ色々持つててやむやむ言つてんだよ頭力ち割るぞ。俺より歌上手いし、おっぱいデカいし、あいつのパーカーの着こなしが羨ましいと思わなかつた日はない。

しかも最近じゃ、あのアホ、タバコまで吸い始めたらしい。俺も人のこと言えねえし、なんならマンチエスターに居た時はダチからハツパ買つてたから、文句なんてサラサラ無いんだが。

にしても、ありやだいぶ命削つて酒とタバコやりまくつてるって感じだな…20年後にはガン確定だなH A H A H A ! ……ハハハツ（震え声）。

だがメキシカンスピリッツはやめとけ、あれは確かにうまいが、600円だけ!?財布に優しくない。しかも中身もすげえよなくあれ、無添加って宣伝文句なのに、タバコつただけで「無添加」ってワードの体によさげな雰囲気消えるんだもんな。

芸能界に入つたりあむちゃん（笑）は、悪い遊びを覚えなかつた代わりに、中間管理職のオツサンみてえに、健康を生贄にする嗜好品ばつか買うようになった。……いや、俺のせいじゃねえぞマジ……タバコ。

『夢見姉妹の最強悪童伝説!!りあむ語録編』

Green・Rainの失言担当といえはボーカルの夢見りあむだ。姉と違って比較的温厚で、あまり誰かを名指しでdisらないが、代わりにひどい失言が多い。舌禍事件を起こしまくるのは夢見姉妹の宿命なのだろうか？今回は夢見りあむの、語録について三つ見てみよう。

初級編

「帰ってシチズン（夢見姉妹が推している地下アイドルユニット）のライブ行きたいです」

某雑誌のインタビューの「今何がしたいですか？」という質問への解答。

なら何故取材を受けたんだと言いたい。

中級編

「はあく?!○○ちゃんから推し変した?!全然わかってない…見る目ナサ男^{レベル}LV. 99だわマジで！」

とあるバラエティ番組で、最近某アイドルユニットのメンバーを『推し変』したという某お笑いコンビの○○さん（41）に対して放ったコメント。台本を丸々無視した芸能界の大先輩に対してこの発言。あまりにもロック、いや、無神経すぎる。

上級編

「アイドルは使い捨ての嗜好品」

ライヴ中に言い放ったと噂になっている問題発言。真偽は定かではないが、もし本当なら、世間からのバッシングは避けられないほどの失言だろう。

夢見姉妹は、ガールズロックバンドの悪童と揶揄されている。この反骨精神を保ったまま、厳しい芸能界の荒波を乗り越えられるのか、二人の今後にますます目が離せない。

「な、なあ健治さん…流石にあの量はヤバい…よな？だつてりあむいつもロング缶一本で顔真っ赤になるんだぜ？アタシちよつと止めてくる！」

「はなせえ〜！ぼくはまだまだのむんだあ〜！やむくらいならのむんだあ〜！……うおつ、やっぱ夏樹ちやん今日も顔が良い……ドアップの夏樹ちやんマジ神……たまんねえ……てかこんだけ近づいてるって事はこれもう実質握手会じゃん？なんなら握手会のその先まで行ってるじゃん!？」

「なんかりあむがやべえ事言ってるぞ……アタシも1年後にはあんなの飲めるようになるのか……ヤバいな日本の法律……おいおいっ！こんなとこで絶対吐いちやダメだかんな〜！」

「う、うぷ……ヤバいかも……」

「またかよチクシヨ〜！あつ！ナイスレジ袋だ健治さん！ほら背中摩ってやるからほら……」

第七話

『Boiler Maker』はGreen・Rainが発表した楽曲、及び同曲を収録したシングル。通算2枚目のシングルである。

『Boiler Maker』

Green・Rainのシングル

リリース 2020年7月11日

ジャンル ロック

レーベル Jコロムビア

作詞作曲 夢見のえる

プロデュース Green・Rain、武島健治

収録曲

1. Boiler Maker

2. A Slight Rain Falling Now

3. The Oasis

4. So Fuckin Whatever

夢見のえる作詞作曲のセカンドシングル。

オルコンシンググルチャートで1位に輝いた。

なお、後に販売された英国盤CDでは、「So Fuck in Whatever」の代わりに「Oil Panic!」が収録されている。

俺たちは怒れる若人だった。

キュートな見た目のアイドルが、クールに、内に秘めたパッションを解放するなんて、マジでクソくだらねえ。

俺たちは怒っていた。あらゆる物にだ。

世間に、他人に、家族に、仕事に、仲間、学校に、国に、友人に、敵に、そして自分。

だが怒りは解放できる。発散できる。あらゆる形でその怒りを外へ解き放つ事で、一緒に燻っていた魂も解放される。

俺たちは怒れる若人で、怒れる社会の奴隷だ。

それでも、手錠をされても屈服しない。

同じ怒りを抱える人間と共に、CDプレーヤーの側から革命を起こそう。
例え破滅の未来が待っていても。

世間は常にぼくたちの味方にして敵だ。

アイドルにして、ロックバンド。

可愛い女の子たちが、激しい演奏をする。

矛盾しているようで、案外成立するこの新たな形の『ロック』を受け入れる人と、それを拒絶する人。

この二つは、常にぼくたちの周りを駆け巡っていた。

そして、それがとてもストレスだった。

賛否両論いいじゃない？冗談じゃない。

ぼくは誰からも認められて、みんなこんなぼくを褒めてくれて、こんな自分のことを心から自分で褒めたいからアイドルを始めた。

今までみたいに、エリートの子の親に言われる通りに専門学校に行つて、周りの人と同じ職場に就く事を憂鬱に思つて、そして親の居ない親が買った家で、親が買ったテレビで、遠い遠い場所で輝くアイドルをカッププレーメンとか食べながら応援して、明日が来ないことを祈りながら寝る。

もうこんな惨めな思いはごめん。

どれだけ楽でも、好きなだけ一人になれても、もうこんな人生から逆転したいからア

アイドルになったんだ。

今のぼくはなんていうか：アイドルというよりも、まるでロックンロールスターだ。それも頂点で孤高に輝くスターじゃなく、魂を切り売りしながら、神経を衰弱させながら、金と酒の海を泳ぎ続けている：そんなリアルなロックスターだ。

お姉ちゃんが支配するバンドで、お姉ちゃんが作った曲を歌う。それもぼくだけが歌うんじゃない。お姉ちゃんは必ずどんな曲でもコーラスをやってる。それどころか、お姉ちゃんがサビだけ歌ったり、逆にサビ以外全部歌ったりする曲も作ってる。そのせいか最近お姉ちゃんはますます歌が上手くなってきている。

じゃあぼくは何なの？ぼくがボーカル担当なんですよ？じゃあ後は何すりゃいいの？紅茶係でもやりゃいいの？

お姉ちゃんと喧嘩した。

『Don't Come Back my Home』

次にシングルで出す予定の曲。

そして、お姉ちゃんが歌う曲。

サビだけでも、サビ以外でもない。

全部。

全部お姉ちゃんが歌う。

ぼくはタンバリンを叩くだけでいいんだって。

ふざけないでよ。

初めてだったんだ。こんなに歌いたって思った曲は。

今まで心のどこかで、かわいくて、ポップで、希望に満ち溢れた、そんな素直な女の子みたいな歌をずっと歌いたって思ってた。

お姉ちゃんが作る曲は、たしかにどれも良い曲だけど、ロックだし、かわいくないし、歌詞英語だし、翻訳しても直訳の場合だと全く意味わかんないし、だから結構意識しなきゃだし、めっちゃロックだし。

だから言われた事だけやって、言われた通りに歌って、そんな感じでした。

だからこそ、この曲はぼくが歌いたかった。

ぼくは英語の歌をネイティブに歌えるのに、英語ができない。

でもこの歌詞のほとんどは、中学生でも分かるくらい簡単だ。

歌詞はシンプルな愛の歌。だけど素敵な歌詞だった。
メロデーも綺麗で、キャッチーな感じで、今までのロックで激しいサウンドじゃなかった。

お姉ちゃんがエレキギターを弾きながら歌って、夏樹ちゃんはアコースティックギターで弾いて、ライラちゃんはいつもとよりも控えめにドラムを叩いて、星花ちゃんは、い

つもみたいにピツクじゃなくて、ツーフィンガー奏法でベースを弾くんだった。

じゃあそうやってみんながこの曲をやってる最中は、ぼくは何したらいいの？

歌いたかった。

他の誰でもないこのぼくが。

こんな素敵な曲だったら、ほんの少しでもいいから、ワンコーラス…いや、サビだけでいいから。

歌いたかった。

いつからか、俺たちのバンドは、「俺たち」から「俺」と「あいつら」になった。たぶん突然なっただんじやない。

少しずつ、ジワジワと、そうなったんだ。

ある日、りあむと喧嘩した。

りあむが俺に歯向かうのは珍しい事だ。

ちよつと噛みつく事くらいはあるが、そんな時は胸倉掴んで睨めばすぐに引っ込む。

だが、今日は違った。

俺が作曲した『Don't Come Back my Home』のデモを聞かせ

た後、俺が全パート歌うという事をみんなに言った時。

りあむは、大泣きしながら俺に向かって怒鳴った。

「なんで歌わせてくれないの!?!」

俺は言った。

「これが良い曲だからだ、俺が歌いたい」

りあむは俺の胸倉を掴んで

「ぼくがボーカルなんですよ!？」

俺はりあむを睨みつけて

「手を離せ、俺の言う通りにしろ」

りあむは顔を真っ赤にして震わせながら、何かを言いかけた後、突然外に飛び出て行った。

「り、りあむさん!」

「リアムさん!」

星花とライラはすぐに追いかけた。

りあむが心配だからというのも勿論あるだろうが、俺が怖いからってのもあるだろう。

だが俺を恐れないヤツもいる。

「説明してもらおうか?のえる…」

「何がだよ…」

「アンタ、本当にただ歌いたいのか?」

「ああ」

「全部?」

「全部」

「りあむはさ、ボーカルなんだよ…楽器も弾けないし曲も作れない、でも歌がある…他の誰よりも上手く歌えるんだよ」

「それがどうした？俺はこの曲に誇りを持つてる…きつと後世に残るくらいの名曲になる筈だ…だからこの曲には俺の全てを詰め込みたい」

「そのためなら、アンタのためなら、りあむの自尊心を傷つけてもいいってのかい？」

「知るかよそんなの、Green・Rainに腰抜けは要らない」

「ああそうかい…」

そう言った後、夏樹は帰った。

このままの流れで、今日は解散することになった。

喧嘩した次の日、りあむ無しでライブした。

事務所にも、現地のハコにも、直前のリハにも来なかった。連絡もなかった。流石に当日になっていきなりドタキャンなんて、そんな真似は俺のプライドが許さなかった。

だから、急遽来れなくなった事を客に言って、俺が演奏しながら全部歌った。その日の客入りは、いつもより悪かった。

途中で帰る客もいた。

なありあむ、今どこにいるんだ？

俺たちは姉妹で、家族で、お互いに必要なんじゃないのか？

もし、俺たちが互いに必要無いような関係だったんなら、そこまでの仲だってんなら。

一生そこで腑抜けてろよ。

でももし、お前がまた歌うって気になったら、どっかのバーで一杯奢ってやるよ。

もし、お前が歌いたい曲があるなら、俺がギターと曲の作り方を教えてやるよ。

だから戻ってこい。

這い上がってこい。

俺もいっしょに這い上がるからよ。

どっかの飯屋で、ライラと、星花と、健治を集めた。

事情を知らない健治に、軽く事件のあらましを話した。

すぐここっから出て行こうとしたから、その草臥れたスーツの袖を掴んで、椅子に叩きつけた。

はつきり言うが、今回の姉妹喧嘩は俺が原因だ。

俺のわがままでこうなった。

「悪かった」

みんなの前で頭を下げた。

みんな目が飛び出るほどびっくりしてた。

どうやら俺は、遠い海から這い出てきて、この世を破壊しに来た邪神かなんかだと思われてたんだろうな。

「こりゃ驚いた…月までブツ飛ぶよこの衝撃…」

夏樹が意味わかんねえ事言うくらい驚いていた。

「わたくしたちより、りあむさんに頭を下げるべきだと思いますが」

星花は結構怒っていた。普段全く怒らない人ほど怒らせるとヤバいと言うが、どうやらマジみたいだ。

「ライラさんは、お二人に早く仲直りして欲しいです」

ライラは怒るよりも困っていた。少し涙も浮かばせている。間延びしたいいつもの喋り口調を忘れるくらいには焦っていた。

「健治、次のライヴはいつだ？……2週間後？……分かった」

俺も覚悟を決める時が来た。

先に這い上がらせて貰うぜりあむ。

「もし、次のライヴまでにりあむが来なかったら、このバンドを解散する」

みんなは黙っている。

「だから、俺がりあむを説得する」

第八話

『夢見姉妹の最強悪童伝説!!のえる語録編』

Green・Rainの暴言担当と言えば、皆さんご存知リードギターの夢見のえるだ。スキヤンダラスな言動と、誰から構わず噛みつく狂犬っぷりは、まさに「悪童」の異名に恥じない振る舞いだ。今回は夢見のえるの語録について、三つ見てみよう。

初級編

「ドナルド・コバックスはクソだ。」

とある音楽番組にて、共演した新人ミュージシャンが語った憧れの人物について、台本を無視してこの発言。

ドナルド・コバックスは、1995年にグランジブーム黄金期を築き上げたロックバンド「NIRVANA」のフロントマンである。

惜しくも自殺してしまった彼に対してこの発言。

まさに外道。

中級編

「マスゴミ全員ブツ殺してやるよー!」

パパラッチに向かって放った発言。

自宅前に張り込んでいたパパラッチの胸倉を掴みながら、鬼の形相で叫ぶ姿は、ネットでも話題になった。

上級編

「R〇G72（某人気アイドルグループ）なんざ全員エイズで死ねばいい」

真偽は不明だが、夢見のえるが言い放ったと噂になってこの発言。国民的アイドルグループに向かってこの発言。もし本当ならば、とても346プロ所属のアイドルとは思えない軽率な発言である。

ガールズロックバンドが産んだ怪物、夢見のえる。

ネットではすでに「鬼、悪魔、のえる」の流行語ができる程、その言動は世間から注目を集めている。

果たして彼女のこの振る舞いは、単なる話題作りなのか？

それともただ単に良識や優しさが欠けているだけなのか？

Green・Rainの今後に期待です。

阿久津徳永（潮新社編集部長）

りあむは煙草の匂いがする場末のバーにいた。

客は一人だけ。見知らぬマスターは、俺を見るとため息をついた後、店の奥に引つ込んでいった。

隣に座つたが、何も言わない。

誰もいないカウンターは、奥に並ぶ酒瓶がよく見える。

横目で見たこいつが持つグラスの中には、琥珀色の輝きを放っていた。珍しい……いつもチューハイとか、たまにジントニツクしか飲まないのに。

しかも、こいつは何も食ってなかった。

手元にあるのは灰皿と酒。ただそれだけ。

俺もタバコに火をつける。

今日のタバコはクソ不味い。

酒も飲みたかったが、マスターが奥に行つちまつたんじや、しょうがない。
「……何か用？」

ぶつきらぼうに、そう言われた。

「俺は、あの曲に誇りを持つている」

改めてりあむに向き直る。

りあむは俯いている。

「だから、俺はあの曲を歌いたいし、この想いは変わらない」

りあむは目を閉じて震えている。俺はこいつの顔を両手で挟んでこっちを向かせてやった。

「俺たちは互いに必要なんだ、りあむ。そしてそれはきつとお前にとつても同じなんだ。違うか？」

ようやく目があつた。

「ぼくは本当に必要とされてるの？」

ようやく口を開いた。

「必要だ」

「じゃあ歌わせてよ」

「無理だ」

「どうして？」

困った。俺はどうやら5つ下の妹と、今までマトモに話さなかつたらしい。

「昔の話だ……まあ聞け」

1995年5月29日に、イギリスのマンチェスターで生まれた俺は12歳の時、暴行の容疑で逮捕された。

お前がまだ7歳の頃だ。

処分は保護観察で済んだ。

俺はただ、「猿」呼ばわりしてきたクソ共の顔面を、整形手術してやっただけなのに、親父は俺を最低なヤツだと言ってブン殴った。

知らなかったろ？

お前は何故か親父に気に入られてたからな。

たぶんあんなヤツでも家族が欲しかったんだろ。

俺たちはよく一緒になったり離れたりしたよな？

親父がお前を連れてどっか行ったり、かと思えば、俺とお袋の下にまた戻ってきたり。とにかく互いに、両親の海外転勤に振り回されてきたよな。

俺が18になった時、俺は日本に居たお前らを置いてイギリスに戻った。生まれの故郷のマンチェスターに。独りになりたかったんだ。

だからそこで、21までしょーもねえクソバンドのローディーをしたた。

だがメンバーと喧嘩して解雇された。

フラフラしてた俺は石油会社で配管工をしたり、そこもクビになったら、失業手当で飯を食いながら作曲したり、ラジオから流れる『The Needles』を耳コピーしたりしてたが、結局は日本に居るお袋に頼らないと、生きてけないまでに追い詰められた。

そして帰ってきて、お前の歌声を聴いた。

そこで初めて、お前のことをすげえって思った。

思い返せば、ガキの頃から俺はお前と家族なのに、どこかチグハグな感じだったよな。常々疑問だったんじゃないか？どうして346プロのアーティスト部門じゃなくて、アイドル部門に入ったのかって。

お前とバンドが組みたかったからなんだよ。

俺はな、クズだ。

でもな、音楽がありや生きていける。

音楽は俺の希望なんだよ。

だから絶対妥協したくない。

だからこそ、お前を選んだんだ。

お前の歌の才能は神から愛されてる。

俺には、お前が必要だ。

もし、お前が歌いたい歌があるなら、ギターと曲の書き方を教えてやる。だから、戻ってこい。

りあむは黙っている。何も言わない。

俺の昔話が響いたのか？分からない。

今までお前とこうして面と向かって、話してこなかったんだもんな。

俺は3万円を机に置き、席を立った。

そしてりあむに背を向け、出口へ向かう。

「……Green・Rainに腰抜けは要らねえ、もしお前が歌えないなら、そこで一生腑抜けてろ」

ヘッドホンを付ける。騒がしいギターソロしか聞こえない。

「ちなみに今のは、お前だけに言ったんじゃないぞ」

俺はお前を信じてる。

だがもし戻ってこなかった場合、そこはもう覚悟を決める時だ。

ぼく、ずっと不安だったんだ。

みんな遠い所にいる気がして。

一番遠い所には、お姉ちゃんがいる。

曲を作れて、ギターを弾けて、歌も最近上手くなってる。

そのうちぼくが必要なくなっちゃうって思ったんだ。

たしかに最初は、結構無理やり歌わされてたけど、なんだかんだ楽しかったし、このバンドでボーカルやれてる事を、誇りに思ってるんだ。

ねえ、ぼくもお姉ちゃんみたいに、イイ曲作れるかな？

ライヴの1週間前に、りあむは帰ってきた。

俺以外のみんなは泣いて喜んでいた。

全く：クソ大袈裟なんだよ。

「タバコ逆さだぜ、のえる」

うるせえリーゼント刈るぞ。

ニヤニヤしてるアホは放っておくに限る。

「りあむ！」

そんなにビクツとすんなよ。

「練習するぞ」

ライヴまでに何とか全部通せる様にやらねえと。

それに、このライヴが終われば、さらに次のシングルも出す予定だ。わざわざ健治に頭下げたんだ、早速チャンス到来って訳だな、ええ？

「うん！」

りあむは笑顔で頷いている。

「このヤロー！心配したんだぜ！」

夏樹がりあむの頭をグリグリしてる。

「お祝いのぎゅー、なのですー」

ライラも満面の笑みでりあむに抱きついてる。

「……、天国？」

りあむお前なあ……腑抜けてねえのに魂抜けてるじゃねえか。

なんかワチャワチャしてる3人を眺めると、星花が近くにやってきた。

「……その、あの時は少し言いすぎました……ごめんなさい」

そういうや、星花はかなり怒ってた。

「気にすんな……俺が悪かったんだからよ」

そう、りあむの葛藤と、ボーカルへの想いに気付かなかったのは、俺の責任でもある。

「それより、俺は結構嬉しいぜ」

そんなキョトンとすんなよ。

「お前が…お前らがりあむを大切に思ってるみたいで」

少し間を置いて、星花は笑った。

「わたくしたちは、りあむさんの事『も』大切に思っていますわ♪」

「ああ…そうかい」

ニヤケてなんかないぜ。いや、マジで。

『Life Forever』はGreen・Rainが発表した楽曲、及び同曲を収録

したシングル。通算3枚目のシングルである。

『Life Forever』

Green・Rainのシングル

リリース 2020年8月8日

レーベル Jコロムビア

ジャンル ロック、ポップ

作詞作曲 夢見のえる、夢見りあむ

プロデュース Green・Rain、武島健治

収録曲

1. Life Forever

2. Ashtray & Chaser

3. Rolling Glory

4. High Flying Bird

4曲目以外は夢見のえる作詞作曲のサードシングル。

4曲目に収録されている「High Flying Bird」は、夢見りあむ作曲による初の楽曲になり、演奏時間は短く、使われるコードも2つだけ、アコースティックギターにタンバリン、鍵盤楽器、ハンドクラップだけとシンプルな曲。りあむが作った

曲をのえるが初めて認めた曲でもある。今までのGreen・Rainとは違った穏やかで、キャッチーなサウンドは、海外からも高い評価を受けている。

オルコンシングルチャートでは、初週で1位を獲得し、ミリオンセラーを達成した。

ゲスト・ミュージシャン

梅木音葉 キーボード

第九話

いよいよ、スタジオ・アルバムの発表とプロモーションツアーだ。
今まで死ぬほど練習した。

曲も書きまくった。

どこでも構わずライブしまくった。

クソみてえなテレビでさんざん宣伝した。

慣れない撮影もした。

りあむと喧嘩した。

色々やってきた。

色々あった。

だから分かる。

このデビュー・アルバムは伝説になる。

確信している。

俺たちは伝説になる。

プロモーションツアーであるこの『Green・Rain Tour 2020』は、

東京、大阪、名古屋の3ヶ所を巡って大型ライブをする。

記念すべき最初の場所である東京では、日本武道館でライブする。

俺たちは、結成してからわずか1年3ヶ月で武道館で立つ訳だ。これは日本で前例の無い快挙であり、俺たちの栄光の証という事だ。

「Green・Rain」はオアシスのデビュー・アルバム、及び映像作品である。

「Green・Rain」

Green・Rainのスタジオ・アルバム

リリース

2020年8月21日

ジャンル

ロック、ポップ

時間

51分58秒

レーベル

Jコロムビア

プロデュース

夢見のえる、武島健治、青羽根勇、真島俊

発売前から収録された楽曲のクオリティーの高さと、夢見姉妹の奔放な言動などでメディアの注目を集めていたこともあり、デビュー・アルバムでありながら日本のチャートで1位を記録。発売日前日の2020年8月20日付オルコンアルバムチャートで1位を記録。21万枚の記録を残した大ヒット作。

収録曲

特に断りがない場合、作詞作曲は夢見のえるが担当している。

1. Queen of Rock, N' Roll
2. Boiler Maker
3. Life Forever
4. Break Burst
5. Under the Blue Sky
6. Anger song

7. Columbus
8. Super High Speed
9. Beat It Down
10. Ashtray & Chaser
11. Diggy's Diner
12. Mary With Child
13. High Flying Bird

(ヒドウン・トラック)

13番目のヒドウン・トラックである「High Flying Bird」は、夢見りあむが作詞作曲をしている。

ライブツアー初日。

リハが終わった。

後は楽屋で本番を待つだけ。

流石に武道館となると緊張する。

マジでフアツクだ。

今の俺は、ロックンロールスターに相応しくない。

不安な時は、性に合わない考えが浮かぶ。

なんとなく今までの事を振り返ってみる。

今思うと、俺たちは色んな人たちに、支えられてきたんだと思う。

りあむ。夏樹。星花。ライラ。健治。

こいつらはもう家族みたいなもんだ。

というか一人マジの家族いるし。

今更何を言うまでもないな。

青羽根と真島。

こいつらは音楽プロデューサー。

ライブでも音響担当だ。

黒髪天。ハの根暗男が青羽根。

若ハゲと長身が特徴の男が真島。

こいつらの手にかかれば、どんな小さなライブハウスでも、カッコいい音作りができた。一番最初にやったレコーディングの、「Super High Speed」の時、ライブのノリが上手く再現できずに言い争いになった。今ではもう遠い思い出だ。

こいつらは、健治とは昔馴染みのようで、よく3人で飲みに行ってるそうだ。

俺を含めたこの8人で今までやってきた。

活動が活発になる程、世話になった人が増えていく。

俺は人に貸しを作るのも、借りを作るのも嫌いだ。死ぬほど嫌いだ。いずれ返さなきゃいけない金はチリ紙以下だと思ってるし、金を返さねえ奴はクソ人間だ。

だが、こればかりはしょうがない。俺たちのパフォーマンズでチャラにしてくれ。

なんてしょーもないこと考えていると、ノックされた。

いよいよ本番か？なんて考えてると、金髪の美女が入ってきた。梅木音楽だ。

「失礼します…」

なんだなんだ？ちゃんと挨拶はしたし、リハも問題なかった。

なんだか気味悪いぜ。

とりあえず冗談めかして用を尋ねた。

「どうした？やっぱリグランドピアノでやりたいのか？」

真顔で首を横に振る。

「いえ…改めて…ご挨拶に伺おうかと…」

「へいへい…お堅い女だ。」

「そしてどうも苦手な雰囲気だ。」

「なんかありそうな感じ。」

「その…少しお話したいのですが…」

「まあまだ時間あるし、別に構わんが」

「では…貴女の曲の事…について少し…」

「ほう？まさか面と向かって言われるとは、アンタ中々度胸あるじゃねえか」

「よろしい…ですか？」

「答えられる質問なら」

「ならば…一つ…尋ねたいのですが…」

「なぜ…貴女の音楽は…悪魔的で…挑発的で…ふてくされた…怒りを解放する…音を奏でるのでしょうか…？そしてそれでいて…まるで純粋な少年の様な…」

「なんだこいつ。」

「非難というよりは、興味。」

「純粋に疑問だから聞いてるみたいだが、まあ不愉快だわな。内容が内容だし。」

てかこいつも青羽根みてえな事言うのな。
やべえよ頭。

まだ何か言おうとしてるが、付き合ってられん。

「狙ってやってるわけじゃないってのが、俺の答えだ。意味は分かるな？ 話は終わりだ」
ぶつきらぼうに言うのと、しよげた顔をして俯きやがった。

「どうやら…込み入った話をしてしまったようです…申し訳ありません」
なんだよ調子狂うな…

てか込み入ったってなんだよ！

ああ！もう！俺も丸くなっちゃまった！

「ち、ちなみに聞きたいんだが」

梅木は顔を上げる。

「りあむは…りあむの曲は？」

少し顎に手を当て考えた後。

「そうですね…　　だど…思います…」

まあ歌詞があれだしな。

よかつたな、りあむ。

お前が聴いてくれる人に伝えたい事、ちゃんと伝わってるみたいだぜ。

最初は緊張で吐くかと思ったけど、トラブルもなく、順調に武道館ライブは進んだ。約1万人のやみくんとやみぢやんの前で歌うとか、1年前のぼくは想像もつかなかつたけど、これが現実なんだから、何が起きるか分からないもんだよね。

一度照明が落ちる。

待機してたスタッフさんたちは、椅子とキーボードを担いで走る。

星花ちゃん、夏樹ちゃんが、それぞれの楽器を背負って舞台袖に移動する。

目が慣れてきた。横目でチラツとお姉ちゃんを見ると、もうすでにアコギを持ってやる気マンマン。

ツアーマンバーの音葉さんも、スタンバイが完了したみたい。

椅子に座る。

手が震えて、タンバリンを落としそうになる。

なんかずつとシャリシャリ鳴ってるのはぼくのせいです。マジ勘弁してください。

照明が点いた。

大きな光が見える。

次に、小さな光の海が見える。

ここでようやく、ぼくはもう炭酸の抜けきったチューハイをいつまでも持つてる事に気づいた。

僅かな残りをグビツと飲んで、後方へ投げ捨てる。

もちろん振り返らずに、ノールックで。

「最後の曲：High Flying Bird：」

1. 2. 3. 4!

ぼくのタンバリンと掛け声に合わせて、演奏が始まる。

本当はぼくもギターを弾きながら歌いたかったけど、それよりもタンバリンを叩きたかった。

何より、ぼくはずっと、お姉ちゃんと一緒に、ぼくの書いた曲をやりたかったんだ。だから、今日は、誰よりも輝きたい…

「I talked the flying bird yesterday」

誰にでも聴こえる歌声で。

「I looked at the flying bird in the sky」

誰にでも分かる歌詞で。

「She seems to be sky」

誰にでも聴こえる演奏で。

「She seems to be sky」

誰にでも伝わる歌詞で。

「Singing in the rain to yesterday」

誰にでも心に響く。

「Going to the line to Another day」

そんな曲を作りたいんだよ。

(I give you all)

お姉ちゃんのコーラスが聴こえる。

(I give you all)

心なしか今日のお姉ちゃんは声が優しい。

[I hate talking about mad]

ぼくの声、届いてるかな？

(I never mind)

お姉ちゃんの声は、ぼくに届いてるよ。

(I never mind)

やっぱり今日は優しい声だよ。

[She's a flying bird high in the sky]

[She's a flying bird high in the sky]

[She's a flying bird high in the sky]

ぼく、作れたかな？

誰からも愛される曲。

ライヴ終了後、打ち上げとして、りあむの希望で、ホテルの近くにあった○将で餃子パーティーをした。

りあむ、健治、星花、夏樹、ライラ、青羽根、真島の8人でやったもんだから、結構クソ狭かった。

だが、悪くない。

この騒がしきは悪くない。

かつて、家に籠って、独りつきりで、ハツパとギターをやった時の事を思い出す。どつちが幸せか？

頭に浮かんだ疑問をギターで殴り飛ばす。

考えるまでもない。

打ち上げが終わり、ホテルへの帰り道で、ちよつと寄り道をした。

深夜のコンビニで、酒とタバコを買った。

「銀麦ホップ」と「あおば」を買った。どっちも安い酒とタバコだ。

近くの公園のベンチで一服していると、健治が隣に座った。

どうやら尾けられてたみたいだ。

……ちよつと自意識過剰か。

とりあえず話しかけてみる。

「お前も一服しにきたのか？おつ、その手に持つてんの玄武ビール……お前、どんだけ飲

むんだよ……」

バケモンかよこいつ。

「あ？ライター？ほらよっ」

そんなくらい持つとけやボケ。

「明日の昼に新幹線、んでそのままリハして、明後日の昼までにはゲネプロできるように

して、夕方本番ね、了解」

……はあ。

こんなところでも仕事のこと聞いちまった。

俺も勤勉になったもんだ。

「……………」

急に黙りやがったから、俺も黙っちゃまった。

しばらく二人で無言で飲んでた。

健治は時々何かを言いたそうにしてたが、結局今日は何も言わなかった。

俺は少し気になったが、眠気には勝てずにそのまま一緒に帰った。

携帯灰皿が無かったから、そこらへんにポイ捨てしようとしたら止められた。

真面目ちゃんかよ…根性焼きしていい？

俺たちはロール○ロイスだ。
この意味分かる？

第十話

俺たちは、とうとう火を吹いた。

「超高速」で、駆け上がって行つたせいだ。

駆け上がっているのに、暗い海に転がり落ちている事に気づかない程に、俺たちは

……

大阪公演を終え、名古屋のホテルで一晩過ごした時の話だ。

一人の男がホテルから姿を消した。
健治が辞めた。

耳鳴りが止まらないそうさ。

医者から仕事を辞めろと言われたらしい。

原因は不摂生とストレス。

俺たちの仕事を取るため常に重圧に耐え、ストレスから逃げるようにやってた酒とタバコは次第に増え続け、気付いた時には取り返しのつかない程にまで、身体は酒に溺れ、紫煙に蝕まれていった。

二人三脚で今までやってきた仲間を失うのは辛い。

俺は仲間の不調にも気づかない程のクズだ。

だが、ここまで来てしまつてはどうしようもない。

もはや、立ち止まる事はできない。

俺たちには振り返る事しかできない。

みんなを集めて報告した。

地獄だった。

りあむは真顔になった。そして酒とタバコを買いに行った。

夏樹は気丈に振る舞っているが、手が震えていた。

星花は静かに泣いた。ただただ静かに涙を流した。

ライラは寂しそうな顔をして、涙を堪えようとしたが、やはり泣いた。

俺たちを支えてくれた屋台骨。

健治は、表舞台に立つ事はない。だがその表舞台をだれよりも支えている。

俺たちはかけがえのない仲間を失った。

名古屋公演の前日。

星花とライラは体調不良を訴えた。

ホテルに引き籠もってるらしい。

夏樹とりあむはりハに來た。

だが、二人とも酷い顔だった。

目には隈、やつれた顔は蒼白になっている。

俺は二人をホテルに追い返した。

「健治が抜けたくらいで、何へラつてんだ！ああ！？テメエらそんな顔してステージに上がるくらいなら！部屋で引き籠もってる！！」

夏樹は見たこともないくらいに、憤怒の表情で何かを言おうと：いや、叫ぼうとした時、りあむは無言で壁を殴った。

そしてこう尋ねてきた。

「一人で歌うの？」

「テメエらが出るくらいなら俺が一人で弾き語った方がマシだ」

「そう…」

二人は帰った。

なあクソ野郎…お前どんだけ慕われてたワケ？

何とか一人でライブを終えた。

まあ厳密には二人でだが。

梅木のキーボードに合わせて、アコースティックギターを弾きながら、予定通りの曲を全部歌った。

案の定大半の客はイマイちな顔をしていたが。

一部の客は、たまにはアコースティックな曲も悪くないって顔をしていた。

ホテルに引き籠もつてたクソニート共を引つ張り出して、新幹線で帰った。帰り道は誰とも喋らなかつた。

健治が辞めた後、新しいプロデューサーが来た。

今や超メジャーなガールズロックバンドとなつた俺たちを、マネジメントで支配した「上」は、ベテランのオッサンを寄越してきた。すぐに俺たちの排他的な態度を悟つたようで、仕事の話以外で、コミュニケーションを取ろうとしてこなかつた。

あの日から、りあむは変わった。

パリピみてえなグラサンと、目が痛くなるような派手なパーカー、そして多種多様なタンバリンを山ほど収集するようになった。

テレビでは、今まで以上にお騒がせキャラをするようになった。

ステージに上がれば暴れまくり、マイクスタンドを蹴り飛ばし、飲み終えたビール缶をブン投げ、セットをタックルでブツ壊し、唐突にタンバリンを殴り飛ばすようになった。

私生活もガラッと変わったらしい。

ハードロックを好み始めた。

酒はウイスキーやウオツカ、タバコは金スピを買うようになった。

サインは今まで以上に親切な対応をする様になったが、パパラッチと悪質なファンには、胸倉を掴んで脅すという過激な対応をするようになった。

あと、免許もねえのに車も買ったらしい。

そして何よりもりあむの変わった所が、乱暴な歌い方をするようになったってことだ。

以前のアイツは綺麗な、まるでガイドボーカルみてえな綺麗な歌い方だったが、今や即興のアレンジや、シャウトをするようになった。

他のメンバーにもとうとう変化が。

ライラは時々体調を崩した。よく笑う子だったのに、今では滅多に笑わない。ドラムの練習にのめり込み過ぎて、腱鞘炎を繰り返した。

夏樹は孤独を好むようになった。誰かと遊びに行く事も、メシを食いに行く事も無くなった。時々一人で、バイクに乗って遠出するらしい。アイツは今どこかに消えたいのかもしれない。

星花は心を病み始めた。今のアイツは神経が衰弱している。アイツはたぶん健治に惚れていた。自分のせいで健治が辞めたと思っっているのかもしれない。

大型のライヴが決まったある日。

とうとう星花は事務所に来なくなつた。

またいつもの様に誰も喋らないレンタル・スタジオ。

プロデューサーが来て、俺を呼んだ。

薄暗い廊下は少し肌寒い。

「涼宮さんは、今日も？」

「ああ…あのクソつたれ…」

「次のライヴはどうするつもりなのかな？」

「中止にはしない。お袋にベースをさせてでも必ずやる」

プロデューサーはため息をついた。

「……なぜ、仲間を無視してでもこだわる？」

「理由なんて無い。それが俺だからだ」

「では、あの子たちは君なのかな？」

「…何だと？」

「あの子たちは、君と同じなのかな？」

この世は盛者必衰。

MAXスピードで駆け上がって行けば、必ず下り坂がやってくる。
アクセルをベタ踏みして超スピードで駆け抜ければ、いずれ事故る。

結局星花はライヴに来た。

ギリギリになって来て、リハもしてねえのに、演奏は出来ていた。
だが、ずっと満たされない顔をしていた。

海に落ちた車は沈むしかないのか？

なあ…教えてくれよ健治…

第十一話

地獄みたいなチームって何か分かる？

ぼくにはよく分かる。

メンバーが常に誰も喋らない状態のチーム。

ぼくの人生で一番幸せだった日々は、人生で一番辛かった日々が変わった。

みんな無表情で演奏する。

誰も喋らない。

誰も笑わない。

そしてぼくは歌い方を忘れ、代わりに叫ぶようになった。

内なる怒りを、解き放つように。

いつからだろうね…

ギターを弾くことを、仕事だと思い始めたのは。

最初は楽しかったのに。

健治が…かつてプロデューサーだった男が辞めてから、アタシたちのバンドは壊れ始めた。

星花がライブをサボった日から、誰も笑わなくなり、誰も休憩中に雑談とかしなくなつた。

みんな仏頂面で、演奏してる。

もう辞め時かな？

そう思った。

健治とは、結構昔からの付き合いだ。

アタシが346プロのアーティスト部門と、アイドル部門を間違えてオーディションに来ちまった時、アタシをアイドルにスカウトしたのが健治だった。これが知り合ったキツカケだ。

最初は割と変な人だと思っていたけど、仕事への情熱と、人の良さはホンモノの、ロックスな男だった。

アイドルとして活動したのはちよつとだ。

事務所に入ってから、すぐに『S l i g h t ・ R a i n』のメンバーになって、そこから今日までリズムギター。

…なんか、アーティスト部門とやってる事変わらないんじゃないのか？

もし、『S l i g h t ・ R a i n』のメンバーにならず、アイドルらしいアイドルしてたら、もっと違う道を進んだのかもしれない。

…どうとうこんな事まで思っちまう様になった。

もうオシマイだね。

アタシはもう弾けないよ。

アタシはロックが好きだ。だから、かつて一世を風靡したロックバンドは大体知っている。

彼らはみんなドラマや映画みたいなエピソードを持つてる。

例えば、殴り合いの大喧嘩までしたけど、なんとか仲直りして、最終的には世界的に有名になるくらいのバンドになった、とか。

ハハッ…思った以上に偉大なんだね、かつてのロック・ミュージシャンってのはさ。

今日も練習は重たい空気のまま終わった。

気まぐれに事務所のカフェで、夕焼けをバックにコーヒーを飲んだ。これが割と美味い。

何気なく一曲弾こうとすると、一人の女の子が話しかけてきた。

「あ、あのっ！木村夏樹…さんですよね？」

栗色の短髪とヘッドフォンがまず最初に目についた。

ラフな服装をしていて、顔立ちは整ってる。

恐らくアタシと同じアイドルの子だろう。

「ああ…そうだけど…」

「で、ですよね!?ファンですよ！サインくださいい！」

まさか同じ事務所の子に、サインをねだられるとは…まあ、そりやそうか。事務所にはちよくちよく顔を出してたけど、メンバー以外のアイドルと関わる機会が無かったもんな。

一応テレビには出たけど、りあむばつか他の子と喋ってたし。

「ハハッ…全然オツケー」

にしても、結構マニアックだねこの子。

アタシのサインを欲しがってる。

いや、でも今ここにはアタシしかいないし、『Green・Rain』のファンだから、アタシのサインを欲しがってたのかな？

「ありがとうございます！あつ…私！多田李衣菜って言います！ロックなアイドル目指してます！」

「へえ…じゃあ…リーナへつと」

「やったー！」

無邪気な顔して、可愛い子だな。

にしてもロックなアイドル…

よく手を見れば、ギターだこが見えた。

どうやらマジに目指してるみたいだ。

「私、『Green・Rain』好きなんです！」

アタシたちの歌を聴いて、好きになってくれて、笑ってくれる。アタシたちはこの笑顔に支えられてきた。

なのに、今のアタシたちは、笑ってない。

誰も……

「き、木村さん…？」

「……いや、何でもない。あとアタシのことは夏樹でいいよ」

「じ、じゃあ夏樹さんで…」

ロツクなアイドル目指してんのに礼儀正しいな。

まあ初対面だし、当たり前か。

てか今脳内でこの子と比べたの、のえるだわ。

アイツと比べたらそりやみんな礼儀正しいわな。

「私、1年前からずっとファンだったんです！」

…本当に好きなんだね。

「あつ、えと、ちよつと無茶なお願いかも…：しれないんですけど…：いい、一曲お願いできます…：か？」

「全然いいぜ！ちようどなんか一曲弾こうとしてたし」

「ほ、ホントですか！じゃあ『The Oasis』お願いしますか!？」

確か…『The Oasis』2枚目のシングルのやつだったね。

てか普通は『Life Forever』とかリクエストするんじゃないかなあ？
やっぱかなり好きなんだねえ。

「つて、それ全然ロツクじゃない曲だけど、いいのか？確かに今持ってるのアコースティックギターしか無いけど」

「あの曲、好きなんです」

まあファンに頼まれたからには、しよーがない。

それに、アタシは普段歌う機会無いし、この際だからガチでやってみるか。

結局あの後、多田李衣菜こと「だりー」となんやかんやで意気投合して、カラオケまで行っちゃった。

全くの初対面なのに、まさか一日でここまで仲良くなれるとは……

流石にバンドの現状までは話さなかつたけど、結構色んなことを話した。久々に。

「ねえ、なつきち」

暗くなった女子寮への帰り道。

唐突にだりーが言った。

「私たち、もつと早く知り合ってたら、ユニットとか組んでたのかな？」

「全然ありえるかもな…でも健治さんが辞めちまったし、しばらくはユニット組む企画なんてする余裕無いから、今後アタシたちが組むとしても、だいぶ先かな」

「えっ!? 健治さん辞めちやったの!?! うわあく茂場プロデューサー落ち込むだろうなあ」

…本当に顔広いな、健治さん。

まあアイドル部門創設時からプロデューサーやってたらしいし、アイドルや他のプロデューサーもみんな後輩みたいなもんなんだろうな。

なんて、話していると、とうとう寮に着いた。

「じゃあね! なつきち! またカラオケ行こうね!」

「おう! あったかくして寝ろよ!」

今日はいい日だ。

新しい友人もできた。

だが明日になれば、またあの重い空気の中で、練習やライブの日々。

アタシはどーすんのが正解なのかな?

第十二話

僕の名前は戸新トニイ・マツキヤロル 未客露流

趣味でバンドのドラマーをやってる。

でも、最近クビになってしまった。

バンドのメンバー曰く、シンプルにヘタ、リズムがガバガバ、暴れてる猿みたいなどラムプレイだから、だそうだ。

正直言い返せなかったけど、みんなひどいよ。

最初は趣味の領域とはいえバンドをやれて、それなりに楽しくやってたし、メンバーもみんな地元の友だちで、それなりに気心の知れた仲だったのに。

僕をゴリラドラマーとか、天パとか、無能とかって好き勝手言ってきたり…土に埋められたり…ナイフで刺すって脅されたり…いじめじゃん…てかもうこれ犯罪じゃん。やっぱりもつとツツパった方がよかったのかな？

僕はあのバンドの中で唯一の所帯持ちだし、めちやめちやキラキラネームだし、物静かな性格だったから、ナメられてたのかも。

はあ……明日も仕事か。

趣味でやってたバンドはクビだし、仕事もうまくいってないし、嫁と子どももしか生き
がないよお〜

ん？

あの公園のベンチに座ってる子……日本人じゃないよなあ。

しかも制服着てるから大人にも見えないし、観光客でもなさそう。

迷子なのかなあ？

「あの一……そこのお兄さん……」

うおつ、話しかけられちゃったよ……やつべ……今のご時世ちよつと顔見ただけで事案に
なるかも。

ドウスツペ……

「そのーちよつとお話ししませんかー？」

ホツ……通報されなくてよかった。

でも褐色の肌に金髪の外国人……珍しいなあ。

てかお話し？何の話すんのかな？

「え？まあ……いいけど……」

いやそんなニツコリされても……

「はじめまして……ございますねー、わたくしライラさんですー」

ライラ……つて確か……

えっ!?

「も、もしかして……Green・Rainの!？」

たまげたなあ……

まさかこんなところで会えるなんて……

「そうでございませう」

うん通りで可愛いわけだ。

「僕の名前は戸新、君のファンなんだけど……サイン貰える？」

あつ……でも色紙ないな……タバコの箱でいいかな……

「いいでございませう、トニーさんへ……と」

うおおおおおおお!

いざこうして目の前にあるとなんか実感沸いてきたア!

うわあく家宝にしよ。

「そういえばトニーさん……何か悩み事でも？」

え?

「え？」

「いえー……わたくしが話しかける前……何か難しいお顔をされてましたですから」

うーんいい子。

でもこんな子に僕の世知辛い話なんか聞かせても…

「誰かに話すと、楽になるかもですよー？」

天使かな？

「いや実はね……」

という事でクビになっちゃったんだよ…」

ライラちゃんホントいい子だわ…

結局全部言っちゃったし。

「トニーさん…パン食べますかー？」

「ありがてえ…ありがてえ…でもこのパンちよつとしよつぱいなあ…

「ありがとう…なんか気が楽になったよ…」

「それならよかったです」

「んー僕だけ話聞いてもらってなんだか悪いなあ。

「あー…えつと…ライラちゃんは何か悩みとかないの？」

「ありや、結構困った顔。」

「こりや何かあるのかな？」

「……そーですねー…その…聞いていただけますですか？」

「もちろんだよ！」

あの後、ライラちゃんから色々聞いた。

お世話になったプロデューサーが辞めてしまった事、練習がハードで毎日クタクタになつちゃう事、故郷のドバイが恋しい事、一緒について来てくれたメイドとまた一緒に暮らしたい事、そして：最近メンバーがピリピリしていて悲しい事。

ライラちゃんは、公園で知らない人と話すのが趣味だそうだが、それさえも最近できない程忙しかったらしく、ストレスを結構溜め込んでいたみたいだ。

なんだか仲良くなった僕らは、せっかくなので、暗くなるまでの僅かな時間だけど、小枝と空き缶や小石でちよつとしたストンプをやってみたりして、楽しい時間を過ごした。

ライラちゃんはとてもスッキリしたと言うか：まあ元気な笑顔になつてたし、これで良かったんだと思う。

ちなみに、この後僕は帰りが遅い！って嫁に怒られた。

でもライラちゃんのサインをあげたらとても喜んで、しばらく機嫌が良かった。

サンキューライラ、いや、ライラさん。

【本スレ】
G
r
e
e
n
・
R
a
i
n

★
8
【畜生姉妹】

0038 名無しの眉毛

りあむの声最近やばくね？

0039 名無しの眉毛

のえるネキ全然おっπ成長しねえな

0040 名無しの眉毛

>>38

酒焼けで声ガラガラになつとる

0041 名無しの眉毛

この前ライブ行ってきたけどりあむ曲の合間にハイボールのし缶飲んでるしヤニも

吸つてた

平常運転だな(白目)

0042 名無しの眉毛

>>39

のえるネキは貧乳だからイイんだろうが！

0043 名無しの眉毛

Columbusは神

みんなもつと聴け

0044 名無しの眉毛

そういや最近りあむ燃えてねえな

0045 名無しの眉毛

>>41

最近酒とタバコの量やべえよな死ぬぞマジ

0046 名無しの眉毛

りあむはマジでヤニくさそう

ヤリたくない

0047 名無しの眉毛

のえるネキはたぶん良い匂い

0048 名無しの眉毛

畜生姉妹どつちも酒とタバコで臭い定期

0049 名無しの眉毛

あの中で最も良い匂いなのは星花ちゃんってそれ一番言われてるから

0050 名無しの眉毛

今テレビつけたらりあむ歌ってて草

0051 名無しの眉毛

もつとライラちゃんやんと星花ちゃんテレビ出せや346

爆破されてえか？

0052 名無しの眉毛

なつきち空気過ぎて草

0053 名無しの眉毛

なつきちつてのえるとタメ張れるくらいギター上手いのめつちや空気だよな

0054 名無しの眉毛

>>43

Boiler Makerの方が好き

0055 名無しの眉毛

>>53

なつきちは大物アーティスト感がすごい

0056 名無しの眉毛

そろそろなんか騒ぎ起こさねえかな

あの畜生姉妹

第十三話

全国250万人のやみくん、やみちゃんは、このテレビの中の天井点火唯我独尊炎上Queenりあむちゃんを見てどう思うのだろう。

テレビに出演して自分って、結構素とかけ離れていてビックリする。

一人の時は、実は物静かだ。なぜなら何か行動を起こすくらい元気がないから。大抵はベッドに肘と膝が固定されて、スマホを常に睨み、アイドルソングをBGMにエゴサか、テキストに動画とかを覗いている。

アニメや漫画なんかもたまーに見るけど、最近はそれさえもしんどくて、ダラダラと何度も観たはずのアイドルのライブ映像を垂れ流して、刻一刻と迫る時間を湯水のように使う。

迫る明日の予定と、次に歌う曲の新譜が常に頭の片隅にあって、それがぼくから気力を奪う。

一人の時のぼくは、静かだ。

だが、テレビの中のぼくは？

事務所のソファに座ってぼくはぼくを眺める。

今日は事務所はガラガラで、誰もいない。
テレビは小気味いいBGMと共に始まる。

サングラスをかけた司会者が番組を回している。

「本日のゲストは夢見りあむさんです！」

拍手の中ぼくが笑顔で現れる。

肩で風をきつて大股で歩いている。

とりあえず、どれだけカットされてるのか見ものですな。

「ばばーん！無敵のバンドルりあむちゃんです！オタクくんたち観てるー!?!」

なんだこの挨拶…馬鹿じゃねえの（嘲笑）

うわあ…やつぱりいつ見ても自分の出演したテレビなんて見れたもんじゃないよ。

「いやあ本日はねーりあむさんがボーカルを務める『Green・Rain』の歴史につ

いてね！振り返ってはいかがかと思えます！」

おお…挨拶に触れられてない…

ちよつとシヨック…

「その前にタバコ休憩いいですか？」

は？何言ってるんだよぼく。

「いや早いわー!?!」

ナイスツツコミ。

あれ？これ台本だっけ？

まあいいやどうでもいいし。

てかこのひな壇芸人うるせえなあ。もつとマシなフオローしろ！（理不尽）

てかそもそもおっさんなんか必要ないんだよ！どうせならそこに可愛いバラドルか置いとけ！たぶんクソおもんない事しか言わないけど！

「では早速フリップをご覧ください！」

ああ〜こうして見てみると割と最近なんだねえ。

なんかもつと長年やってた気分だわ。高校卒業した時もこんな感じだった。まあ高校の思い出とかほぼ皆無なんですけどね。

「いやあく〜こう見るとほくやっぱ天才じゃん!?ほらみてみて？ぼく結成してから1年ちよいで武道館ライブしてるんだよ？オタクちよろすぎい！」

うわあぼくオモシロ。

笑っちゃうんすよね。

「はい、ではまず最初は『S l i g h t ・ R a i n』のご紹介から…」

いやスルースキルすごい。

どうせ今更何言ったか確認するまでもない。

言った事を後悔したって、過去は変わらない。

なんとなくテレビ見るのに飽きて、携帯をいじる。

ぼく以外の…芸人や司会者の声が、まるでホワイトノイズの様に。

テレビのぼくは笑っている。大口開けて。

ぼくは笑っていないのに。

最近はずっと心がしんどい。

物事が良くなったり悪くなったりを繰り返している。

またお姉ちゃんに小言を言われた。

無駄遣いが多いってさ。

何を買おうが明日生きていればよくない？

今更何言ってるんだよ。

大体みんなピリピリしてんのもお姉ちゃんのせいだろ。

ああ〜またこんな事考えちゃう。

誰も悪くないのにね。

やっぱりPサマがいないと寂しいよ。

お姉ちゃん以外みんな元気無いなあ。

はあ……

おつ、このサングラス中々イイなあ…ポチろ。

「という訳で、夢見りあむさんでしたー!」

「はい、あじゃじゃしたー」

テレビのぼくは元気だ。

健治様が辞職して、どれだけの時が経ったでしょう。

自分でも驚くほどに笑顔が減ったと自覚しております。

バイオリンを弾くことも少なくなりました。

ウイーンにいるお友だちに電話をして、休めと言われました。どうやら本格的に参っているみたいです。

健治様をお慕いしていました。

わたくしに素敵な世界を見せていただき、そして連れて行ってくださいました。きつとわたくしがテレビやコンサートに出る限り、何処かで見守ってくださいるのでしよう。

しかし、もうわたくしのそばで見守ってくださいることは無いのでしよう。もう離れてしまったのです。

わたくしもそこに連れて行って欲しいのに。

それがたまらなく悲しくて、辛くて、切なくて。

かつて宿った手の温もりさえも、今は憂鬱に感じてしまいます。

両親は心配しているようでした。

やはりわたくしの神経は衰弱しているようです。

未だバイオリンは悲しい音色を奏でます。

ベースは無機質な音を繰り返すのに。

休みなのに、どういう訳か事務所に来てしまいました。

中庭のベンチに座って、かつてここで健治様と共にお話した事を思い出します。

お稽古の事、音楽の事、アイドルの事。

そのどれもが綺麗な思い出だったのに、今では、一人きりの夜にわたくしを孤独にさせる毒の様にさえ思えてしまいます。

事務室の窓、廊下を歩く社員の方々、カフェのテーブル。

こんなところにはいない筈なのに、つい目で追ってしまいます。

ただただ座ってボーっとしていると、何処からか美しいフルートの音色が聴こえてきました。

見覚えのある方です。水本ゆかりさん。

よく目を凝らすとチェロを弾いていらつしやる方。おそらく西園寺琴歌さん。

二人とも楽しそうに演奏していらつしやいます。

どうしてでしょうか？わたくしには何故かお二人が、とても眩しく感じてしまいます。

『Green・Rain』での活動は楽しいです。

バイオリンとは違う、ベースの魅力や楽しさを知れた事はとても喜ばしい事です。

ですが、もつと違うユニットで活動していれば、もつと違う自分になれたのかもしれない。

誰かに恋する事も無かったのかもしれない。

……どうやらわたくしは、疲れているようです。

少し涙が…溢れそうに……

どうして止まらないのでしょうか？

健治様が去ったあの日に、もうとづくに枯れてしまったのかと思いましたが。

あの眩しい音色の仕業なのでしょうか。

あの、眩しく、美しく、華やかで、儂い。

あの二人の、フルートとチェロの音色の所為なのでしょうか。

ですが何故でしょう。

どこか晴れやかな気分です。

涙が悲しみを取り去ってくれたのでしょうか？

わたくしは、誰一人過失の無い失恋を乗り越えたのでしょうか？

心の中に青空が広がったのは

あの二人の、フルートとチェロの音色の所為なのでしょうか。

『Green Submarine』はGreen・Rainが発表した楽曲、及び同曲を収録したシングル。通算4枚目のシングルである。

『Green Submarine』

Green・Rainのシングル

リリース 2020年9月15日

ジャンル ロック、サイケデリックロック

レーベル Jコロムビア

作詞作曲 夢見のえる

プロデュース Green・Rain、亀田悠真

収録曲

1. Green Submarine

2. Thunder Shock

3. G・R

4. Life Forever (Live at Budokan, 20)

夢見のえる作詞作曲のシングル。

セカンドアルバム『Morning Rain Feeling Pain』からの
シングルカットである。

『Green・Rain』としては初の、サイケデリック・ロックな曲がいくつか収録されており、従来の音楽性を好んだリスナーからは賛否両論だった。

第十四話

『Get with it』はGreen・Rainが発表した楽曲、及び同曲を収録したシングル。通算5枚目のシングルである。

『Get with it』

Green・Rainのシングル

リリース 2020年9月29日

ジャンル ロック

レーベル Jコロムビア

作詞作曲 夢見のえる

プロデューサー Green・Rain、亀田悠真

収録曲

1. Get with it

2. It's Special People

3. Not the Plan

4. Columbus (Live at Budokan, 20)

夢見のえる作詞作曲のシングル。

セカンドアルバム『Morning Rain Feeling Pain』からの
2枚目シングルカットである。

のえるがメインボーカルを務めるアコースティックナンバーが多い事が特徴だが、意外にも従来のリスナーからの評価は高く、またのえるの歌唱力も高い評価を受けている。

時間というものは、特效薬だ。

不思議なもので、壊れた関係も時が経てば修復されていく。

みんな時が経てば、怒りや悲しみを忘れていく。

それは奴らが優しいから？人として優れているから？

俺は別だ。俺は怒りを忘れない。

それは俺が優しくないから？人として劣っているから？

奴らは特別なんかじゃない。

俺が特別なんだ。

何故それほどまでに、人に対して悪意が無いんだ？アイツらは。

マジありえねえぜ。人じゃねえのかよ。

アル中ヤニカスの妹は体を傷つけている。

新しい形のリスカじゃねえのか？

ヤツは最近文句を言わなくなった。ギャーギャー喚く事もなくなった。

どっかのアイドルを俺に推す事もなくなったし、事務所の先輩アイドルに話しかけられてもキョドらなくなった。

ヤツはヤツらしさがなくなった。

わずかに、ヤツらしさを感じる時がある。

ギターを教えている時だ。

その時だけ、「わからんしんどい指痛い」と喚く。

俺たちは何かが変わり始めている。

セカンドアルバムの話がきた。

既に何曲か録音しているし、プロモーションツアーの準備も着々と進んでいる。

だが、足りない。やはり足りない。

俺の内なる野望を伝えるべく、メンバーを集めた。

ミーティングルームで集まる機会はなかなか無い。

「お前ら、こんなんでいいのか？」

ホワイトボードに書いてある予定表を見せる。

「……予定ビツシリじゃねえか……なんか文句あんの？」

こいつらは、どうやら何もわかつちゃいねえ。

「ここに書いてあるのは全部国内の話だ……つまり俺たちはまだ日本でしか活動してない」

りあむはチューイングガムをティッシュに吐き捨てた。

「……なに？アメリカでも行くの？」

俺はノートパソコンで、俺たちが作成して、動画サイトにアップしたミュージックビ

デオを開いた。

「みんなコメント欄をよく見ろ」

みんなずいっと、パソコンに集る。

「確かに……海外の方々も、たくさんコメントしていらつしやっていますね」

……よく考えたらうちのメンバーは、みんな動画サイトとか観ないタイプだったな。

妹以外。^{アホ} まあいいや。

「なぜ俺たちの曲は全て英詞なのか？…それは海外での活動を視野に入れていたからだ」

流石にみんなしつくりした顔をしている。

りあむは意外と英語ができる。

ヤツは英語なんてできないって抜かすが、幼少期に家族の海外転勤に伊達に振り回されてない訳だから、読み書きはからつきしだが、ややイギリス訛りだがネイティブに話せる。

だから海外のリスナーも俺たちの曲の歌詞を聴き取れるし、日本の売れ線ではなく、俺が影響されてきたインディーズ・ロックを意識した曲作りをしているから、刺さるヤツには刺さるというカラクリになっているのだ。

「という訳で、次のツアーが終わったら、アメリカでオーデイションに出る」
「どうやらこれにはしつくりこない顔だ。」

みんな固まってる。

まあ無茶言ってるのは百も承知だ。

健治の後釜である亀田Pもびつくりして口を挟んできた。

「…確かにこのユニットは定期公演もありませんし、他のユニットと比べてテレビも少

ないです…ですが、いきなり海外と言うのは…ですね…」

うるせえぞこの野郎。

「うるせえぞこの野郎」

「!? ……え、ええ…?」

まあいくらネットでちよつとした人気が出たからといって、いきなり、はいアメリカで活動しますなんてのはまあ厳しい。

仮に上手いことが運んだとしても、向こうの客が俺たちの音楽を好きになるかは別問題だ。

レコード会社だって、結果の無い奴らとは契約しないだろう。

しかし、どのみち今の勢いを保たなければ衰退していくだけだ。

最近、メンバーはみんなどこか疲れている。

だが知るかそんな事。

みんながどうなるかが、ヘラってようが知るか。

絆? そんなもんクソ喰らえだ。

俺は成り上がるんだ。

失業手当で食う冷たいメシはもうご免だ。

俺は栄光を掴むんだ。

そのために、海外でやるしかないんだ。

「次のツアーの出来が完璧だったら、俺たちはアメリカに飛ぶ。これは確定事項だ：：以上、話は終わりだ」

お姉ちゃん頭おかしいんじゃないの？

よく考えろよ、ぼくたちの功績を。

確かに武道館ライブ最速記録はすごいし、初週オルコンチャート1位もすごい。

でも、ぼくたちはアイドルアルティメイトで優勝したわけでもないし、アイドルアワードだって受賞しちやいない。

日本でトップでもない奴らが、海外で通用する訳ないじゃん。

何考えてんの？マジで。

色々あつた後、久々に夏樹ちゃんにご飯に来た。

ほんともうマジで久しぶりだ。

話があるつて誘われなければ、たぶん次に行く事はずいぶん先だったかも。

久しぶりすぎて、店員と目を合わせられなかった。

シラフで他人と話せる気がしない。

夏樹ちゃんは普通に餃子とか好きだ。

にんにくとか気にならないのはロックだね。

「りあむは○将好きだな〜」

毎回言ってるよねそれ。

「まあ実家みたいなもんだし」

グラサンと帽子が邪魔くせえ。

でも帽子がないと、絶対髪色でバレるし、そのせいで特定厨が元氣100倍になっ

ちやうからなあ。

「テキトーだなあ…おつ、このラーメンいいなあ」

ひえゝ飯にもアイドルがこんな深夜に高カロリーなモノを食ってるゝ恐ろしやゝ

「ぼく餃子とハイボールで、よろしく!」

ひえゝ店員来たあゝなんかぼくのいつもの注文覚えられてそうで嫌だなあ。

てか人が注文頼んでる時つて…時間こそ短いけどなんか気まずいよね。携帯いじるのも悪い気がするし、かと言つて喋つちやだめだし。

「あれ?夏樹ちゃんお酒頼まなかったの?」

うゝんもう夏樹ちゃんも20歳かあ。

てかなんならぼくもう21歳だし!

ウチ誕生日パーティーとかしねえなあ。

時の流れとかお姉ちゃんとか色々残酷すぎてやむわ。

「ハハツ…アタシはいいかな…ハハツ」

うわあーすつごい苦笑い。

まあ反面教師のりあむちゃんが居たらこうなるのかねゝ

ん?てかよく考えたらぼくが酒飲み始めた理由つてお姉ちゃんじゃん!?

ちくしよゝ!…許さんぞおゝ!!

ライブの最前列に必ず厄介オタクくんが現れる呪いかけてやるう！あつてもこればかりも被害被るじゃん。やっぱやめよ。

てかこのライターオイル切れそう。

「おいおい……ここ禁煙席だぜ？」

やっべ無意識だったわ。

「ごめんごめん体が勝手に」

「いやそつちのがヤバいだろ」

確かに

「確かに」

頭抱えないでよおー！やむよ!?

「それで……まあ早速本題入っていい？」

どうせ内容は決まってる。

「お姉ちゃんの事でしょ？」

凶星。

「なあ、今思い返すとき、のえるは異様に曲作りにこだわってたよな？かつてアタシたちがまだ『Sligh t・Rain』だった時の委託した曲もお蔵入りだし、青羽根さんや真島さん以外の人と音作りしなかった。とにかく誰かと関わらずに曲を書いている。

トップに立ちたいし、色んな活躍をしたい…だが、あの執念は一体何なんだ…？」

夏樹ちゃんは、良い人だ。

信頼してたプロデューサーを失って、なお活気に満ち溢れてる。

そして、かつてはお姉ちゃんに怒りを抱いたのに、許そうとしてる。そして理解しようとしてもしてる。

みんなが自然と破壊された関係を修復している。

夏樹ちゃんはどうやら修復だけじゃなく、お姉ちゃんを理解したいとも思ってるみたい。

なんていうか…良い人だ。

「ぼくはお姉ちゃんと行動を共にしないし、よくわかんない」

ああそんなシヨボンとしないでえ〜！

やばいやばいなんか言わなきや（使命感）

あつでもこの表情レアだな。

う〜んしょんぼりしても顔が良い（確信）

「強いて言うなら…生まれつき？」

おつ餃子がナイスタイミングで来た！

F o o → 旨そう。

そんなこんなで色々話しながら美味しくいただきました。
脂っこい餃子食った後のタバコ最高。

でも公園だからマジさむ。さむくてやむ。

「りあむ…タバコやめたら？アイドルなんだし」

熱いマジレス。

しかしやめられない止まらない。

りあむちゃんのタバコとSNSは常に火がついてるのだ。

「これとお酒しか生きがい、ないもん」

【速報】夢見りあむ、キチガ○をしばく。

0001 名無しの眉毛 20/9/19

これマジ?

https://niyavideo/

0002 名無しの眉毛 20/9/19

りあむ声ガラツガラで草

0003 名無しの眉毛 20/9/19

ライヴに乱入してきたキチ○イサイドにも問題がある。

0004 名無しの眉毛 20/9/19

どっちもひでえなマジで

0005 名無しの眉毛 20/9/19

日本と思えねえ治安だな

0006 名無しの眉毛 20/9/19
結構ガツツリ殴ってて草
0007 名無しの眉毛 20/9/19
こいつら割と人気なのに何でまだライヴハウスでやってんだよ
0008 名無しの眉毛 20/9/19
警備員仕事しろ

第十五話

『Standing Middle Finger』はGreen・Rainが発表した楽曲、及び同曲を収録したシングル。通算6枚目のシングルである。

『Standing Middle Finger』

Green・Rainのシングル

リリース 2020年

ジャンル ロック、グランジ

レーベル Jコロムビア

作詞作曲 夢見のえる

プロデューサー Green・Rain、亀田悠真

収録曲

1. Standing Middle Finger

2. Red Rum

3. Hurricane Ride

4. Break Burst (Live at Budokan, 20)

夢見のえる作詞作曲のシングル。

セカンドアルバム『Morning Rain Feeling Pain』の3枚目のシングルカットである。グランジの特徴である暗く苦悩に満ちた歌詞や、静と動のディストーションギターによる暗くヘヴィなサウンドによって構成されており、前回のシングルと真逆の方向性を示したことで、のえるの作曲センスの幅広さを周知させた。

とあるライブハウスでの演奏中、クソ無能で怠け者な給料泥棒のボケカス警備員が、俺たちが奏でる爆音をBGMに目かつ開きながら居眠りしやがっていたせいかは知らねえが、あのクソどもが仕事をサボりやがったせいで、どっかのキモオタキチガ○野郎にステージに乱入された。

一気に混乱だ。

悲鳴とカオスとキ○ガイの怒号の大嵐の中、不思議な安堵さえ覚えていた俺は、死ぬほど忌み嫌っていたはずの退廃的かつ暴力的な空気に酔いしれていた。

さあ、いざギターであのイカれた野郎の頭をカチ割って、頭からつま先までデイストーションしてやろうとした時、りあむがブチギレた。

正直意外だった。

いざという時の荒事は俺の仕事だと思っていたし、それがやるべき事だとも思っていた。

他のメンバーは所詮イイ奴らだ。故に強硬手段ができない。

アイツらは、所詮は温室育ちの良い子ちゃんだ。

だが、りあむはどうやら野生の魂があるらしい。

その日、りあむはキレた。

何曲も歌い終わった後の、ガラガラの声で叫んだ。

自分よりも背が高い小太りのイカれたオッサンの胸倉を掴んで叫んだ。
鬼のような形相で叫んだ。

叫びながら顔をガッツリ殴っていた。

その日、りあむは怒りを解放した。

「テメエーッ!!このクソオタアーツ!!マジでブツ殺すぞオーツ!!??」

周りが静まり返る中、俺はこう思った。

お前：普段からその声量で歌えや。

まあその後は、色々とゴタゴタあった訳だ。

まず意外にも、りあむは前科一犯にならなかった。

あのイカれポンチは、ポケットに折り畳みナイフを入れていたらしい。なぜそんなも
ん持ち歩いていたかなんてのは知らない。どうでもいい。

後は客の証言で正当防衛が証言された。まあ向こうは刃物持ってるマジ○チなんだ
から残当だな。

そんでりあむのSNSが燃えた。

いや、よく考えたらこれ通常運行だな。

ちなみにこれのおかげで逆にファンも増えた。どうやらロックなファンが増えたみたいで良かった。

あと事件の現場となったライブハウスは潰れた。りあむの炎上の飛び火のせいである事ない事書かれて言われて眩かれたからだ。まあどうでもいいな。

俺は死ぬほど興味無かったが、俺以外のメンツはちよつと落ち込んでいた。

なんでも、『Sl i g h t・R a i n』時代にやった最初で最後のライブの場所がここだったらしい。

ゲロクソどうでもいいな。マジで。

ちなみにこの事件の影響のせいか、俺たちのライブは暴れてもいいという風潮になった。

俺はカチンと来た。

りあむもカチンと来た。

りあむはライブで歌う時、いつものスタンスに加え、間奏中は観客に向かって中指を立てたり、棒立ちのまま親指で首を切るジェスチャーをするようになった。

もはやロックスターではなくプロレスラーだ。

：気に入っていないとは言っていないぜ。

アメリカに行く前に、喧嘩腰のメンタリテイを習得したみたいで一安心だな。

さて、もうすぐセカンドアルバムとプロモーションツアーだ。

前回同様ツアーの準備と録音のおかげで、どっかしらに飛び回る必要はなくなつたが、やはり俺の仕事量だけがが増えて不愉快だ。

「俺」と「あいつら」はしばらくプライベートな話をしていない。俺が忙しいから配慮しているのか、それとも単に内輪で仲良くやるのに忙しいのか。

まあ好きでも嫌いでもない連中と、一緒に居なきやいけないってのは、まるで家族みたいだな。クソツタレ。

そうそう、最近夏樹は作曲に凝ってるらしい。だがどれも何というか…イマイチ燃えない曲だ。悪いが俺の趣味じゃない。どーしてもやりたいってんなら、俺のテリトリーから離れた所でやって欲しいね。

今回やる予定のツアーは前回と比べライブの数が多い。

前回みたいなトラブルは許されない。

大型ライブの度に体調崩すメンバーなんて要らねえよな？そんなんじやファンは着いてこねえよな。

流石に今回は大丈夫だろ。亀田Pが辞めても付き合い短いからみんな立ち直れるだろ？いやでも真島は付き合い長いしな…今のうちにクビにしとくか…？

だが真島までいなくなったら代わりの人材探すのかったりいな…よかったな真島、失業手当でメシを食うハメにはならないようだぜ。

ライラと星花のスキルもグングン上達しているみたいだ。

ライラは腱鞘炎になるほどの自主練を辞めた。ライラが度々行ってるらしいドラム教室を覗くと、トレーナーが一人増えていた。もしかすると良い指導者に会えたのかもしない。

星花はリズムが走ったり、細かなミスがキツパリ無くなった。つまり精神的に負担のある場面でのミスがキツパリ無くなった。かつて、たかが失恋如きで病んでリハをサ

ボつてたような奴とは思えんほどの上達っぷりだ。

りあむも新しいサングラスとタンバリンを買つてやる気に満ちている。コイツはマジのアホだから気にしなくていいか。

作曲を却下した事で夏樹のモチベーションが下がることを危惧していたが、どうやらそんな様子もない。なんだか逆に不気味だぜ。

結成したての空気に戻り始めている。

重たくピリピリした空気は消え始め、休憩中の談笑や休日に遊びに行く事も増えた。

この時俺もなんだかんだで遊びに連れて行かれる。

不気味だ。

りあむの件から思っていたが、どうやらウチのメンバーは俺が頭を下げようが下げなからうが、時間が経てば怒りや悲しみを忘れ仲良しこよしになるらしい。まあ言っちゃなんだが不気味だわな。

だが、そんなことも言つてられん。

要は良い演奏が出来れば良いんだ。

気にすることはない。

第一回バンドルアワード。

企業の豚が考えたクソイベントだ。

新シングルを宣伝するという目的がなければこんなゴミイベント出るつもりはなかった。

まあ聞け。

俺たちは346プロのアイドル部門に所属しているバンドアイドルという括りなわけだ。分かるよな？

だがプレイしている楽曲のジャンルはロックだ。つまり俺たちはロックバンドでもあるわけだ。ガールズロックバンドというヤツだな。

だつてのに、ステージ上での飲酒、喫煙、中指を立てるといった行為を運営から禁止された。

頭ん中にクソでも詰まってるのか？

俺たちは今までそうやってきたし、ファンもそういつた立ち振る舞いを望んでいる。散々禁止禁止言われたわけだが、結果はご存知やってやった。

なにかと渋るりあむにも飲ませて吸わせて立てさせた。

俺も飲んで吸って立てた。

ついでにりあむから奪い取ったタンバリンを観客に投げ入れた。「あれはオキニだつた」つて後で文句を言われたが、知らねえよそんなこと。どうせ腐るほど持つてんだから我慢しろ。

まあ正直言つて出禁になると思つた。

審査員にも念入りに指差した後、中指をアツパーカットのよう突き上げてやった。

りあむはいつも以上に泥酔していたので、マイクスタンドと喧嘩したり、見えない敵と殴りあつたり、絶賛演奏中の俺にセクハラをしていた。

ちなみに一部の客と審査員のほとんどがドン引きしていた。

ライラと星花と夏樹は慣れているので涼しい顔してスルーしてた。

慣れつて怖いな（他人事）

だが審査員の一人はそんな俺たちを大層気に入ったらしい。

その審査員の名前は高井一郎。

たぶん日焼けサロンに週7で通ってるレベルの肌の浅黒いオッサンだ。

だが、彼のおかげで俺たちはとあるチャンスを掴み取る事ができた。

やはり幸運というモノは探し出さなきゃ見つからないらしい。

会場を後にする時に、出禁を言い渡してきた運営のオッサンにがつり中指を立てながら「うっせバーカッ！」って言ったら、どうやら動画を撮られていたようで、ネットでめつちやバズった。

掲示板生まれのオタク共は俺たちが大好きなようで一安心だ。

第十六話

さあ、いよいよツアーだ。

M o r n i n g R a i n F e e l i n g P a i n T o u r .

公演する場所は、東京、横浜、名古屋、大阪、神戸、福岡の6ヶ所だ。

前回のようないきな失敗のないように、ツアーの準備もしっかりしてきたし、ツアー前は仕事も減らした。万全の体制だ。

サポートメンバーもちゃんという。

キーボード担当、梅木音葉。

…よーするにいつものヤツだ。

さらに、今回は前座もついてくる。

どうやら俺たちはとうとう前座を引き連れてツアーでできるまでに成長したということだ。

企画を聞いた時から、割とワクワクしていた。事務所の身内とはいえ、そもそも俺は交友関係が狭いから、どんなヤツが来るのか知らねえ。

どんな演奏をしてくれるのか楽しみだ。

というわけで、ツアーの準備期間の間に顔合わせした。

バンド名は『Star Beats』スリーピースバンドだそうだ。

メンバーは多田李衣菜（V o / G t）、五十嵐響子（B a）、白雪千夜（D r s）の三人。

数曲披露してもらったが、これが中々イイ感じ。歌詞は日本語で、演奏もまだ荒削りだが、光るものを感じた。

多田李衣菜は、声質こそ可愛らしい感じだが、声量も出て迫力があるし、始めたばかりの初心者にしてはギターも中々様になってる。

五十嵐響子はほぼ素人にも関わらず、いきなり5弦ベースをツーフィンガーで弾く逸材だ。テンポの良い曲だとかや走り気味になるが、まあ許容範囲内レベルだな。

白雪千夜はリズムが精密だ。叩く力にまだムラがあるから、腕はまだ一流とは言えないが、精確なリズムを保てるだけのポテンシャルは充分ある。

全員アイドルとして、結構な期間やってきた連中だ。

今後の成長に期待できそうだ。

今回はトラブルが無いと嬉しいんだが。

ツアー初日、東京でのライブ。

なぜかぼくはあらゆるモノに対して喧嘩腰だった。

1曲目、『Standing Middle Finger』

セトリ組んだヤツ誰？

いきなりこんな激しいの入れるなよ。

マジ見る目無し男の仕事できなさ男Aだわ。

なんて思っていると、会場が真っ暗に。

演奏スタート。

入りは上出来。

星花ちゃんやんと夏樹ちゃんを横目で見ると、笑っていた。楽しそうだなにより。

お姉ちゃんやんの荒々しい歪んだギターが聴こえると、ぼくの魂が震え始める。

照明さんが張り切ってる。

レーザー演出とかしちやってさ。

目がチカチカしてきた。

とりあえず酒飲んどこ。

うーん、やっぱライブにはビールだね！

さて、やりますか。

「I'm all over my crisis」

「I feel hot but I'm back in the ice」

目が慣れてきた。
光の海だ。

ピンクの小さな光が、蛍の大軍みたいで美しい。

「Out of control so give up」

「Come on! come on! today」

やべ、シャウトし過ぎた。

別にいいや、今日はパンクに行こう。

「I'm growing middle finger」

「I feel hate in the shock of the peace」

「I fall into the darkness town」

「come on! come on! come on!」

んー! テンション上がってきた!

いいねえ〜! やっぱり!

歌うのってイイ気分だ!

まさに今実感してる! よ!

F o o o o o → !!

「Love is a kill machine」

「In the rusty garage」

「It's all in my head」

「It's all in my head」

間奏。

イライラしてきた。

まだ歌いたい。

のむ。飲む。酒を飲む。

あ？アイツなにこつち見てんの？

中指立てちやえ。

「Love is a demonic」

「I hate miracle magic」

「It's all in my head」

「It's all in my head」

「It's all in my head」

「come on! come on! come on!」

叫ぶ。がなる。シャウトする。

さあ、祭りは始まったばかりだ。

「Morning Rain Feeling Pain」はGreen・Rainのセ
カンド・アルバム、及び映像作品である。

「Morning Rain Feeling Pain」
Green・Rainのスタジオ・アルバム
リリース

2020年11月4日

ジャンル

ロック、グランジ、サイケデリック・ロック

時間

50分5秒

レーベル

Jコロムビア

プロデュース

夢見のえる、亀田悠真、真島俊

チャート最高順位

1位（イギリス、オーストラリア、日本）

3位（オーストリア、ドイツ、オランダ）

4位（アメリカ）

5位（ノルウェー）

8位（フィンランド）

19位（フランス）

発売直後は国内でしかヒットしなかったものの、後に世界中で爆発的な売り上げを記録し、Green・Rain最高のセールスを記録したアルバム。日本だけでも、歴代4位となる470万枚以上、全世界では2500万枚以上を売り上げ、Green・R

ainは世界を代表するバンドとしてスターダムへ駆け上がった。2020年の日本ロック・メーカー誌の年間ベストアルバムランキングにおいても1位を獲得している。ジャケット写真が横断歩道の白線の上にGreen・Rainのメンバーが寝そべっている写真のため、インターネット上で物議を醸した。

収録曲

全曲、夢見のえるによる作詞作曲。

1. Good Night
2. Get With It
3. Standing Middle Finger
4. Don't Come Back my Home
5. Hey You!
6. Green Submarine
7. We are Shadow People
8. She's Mystic
9. Morning Rain Feeling Pain
10. Craft Gin Supernova

ツアーはあつという間に終わる。

デイストーションギターの残響は、頭にまだ住み着いてるのに。

全ての公演が終わり、なんやかんやし、打ち上げが終わり、家に帰った。
風呂に入って、ベッドに倒れ込む。

飲み過ぎた。

明日は二日酔い確定だろう。

ガンガン痛む頭を抱えつつ、今回のツアーを振り返った。

トラブルはなかった。

何もなかった。

ツアー中俺は傲慢に振る舞った。

少しでも何かをしくじったスタツフが居たら、とにかく怒鳴り散らした。

メンバーにも同じことをするつもりだったが、この数週間の間、リハ本番問わず一度もミスをしなかった。

ビビった。

何事にもトラブルやミスは付き物だ。

俺だってミスすることはある。

だが、奴らはどうだ？

このツアーの間、ミスしなかった。

ツアー前はミスを心配していたのに、今はミスが無いことを心配している。可笑しな話だ。

そりゃ、リズムが多少走ったりはした。だがあんなのミスに入らねえ。むしろライブ感がゴリツゴリに出て、CD音源垂れ流しを疑われないし、テンポが速くなると客もノれるからありがたい。

そして何より奇妙なのは、奴らはライブ中ずっと楽しそうに笑っていた事だ。不気味だ。

体調が悪いから、弱気になってるのか？

いいや、そんなことはない。ただ奴らの頭がお花畑なだけだ。気にすることはない。今回のデキは最高だった。

それで良いじゃねえか。それで話は終わりだ。クソツタレ。きつとアメリカでも成功できる筈だ。

今俺には何が必要だろう？

退職届？金？酒？ヤク？

ああ〜久々にハツパ吸いたい。

訳わからん事考えてると、もつと訳わからなくなりたくて吸いたくなる。

目蓋が勝手に落ちてくる。

暗闇に包まれる。

俺の脳はまだビートを刻んでいるのに。

体はいち早く眠りたいようだ。

精神は加速していくのに。

肉体は駐車したいようだ。

勝手に脳裏に浮かぶロサンゼルス。

いや、シアトルでもいいかもしれない。

待ってろアメリカンドリーム。

俺は成り上がる。

あらゆるモノを犠牲にしても。

クソカス髭もじやロン毛爺の神サマ、妹の喉と俺の魂を差し出すから、世界の頂点に立てる曲を書けるようにしてくれ。

OK?

第十七話

まさか、だりーと一緒にライブできるとはね。

亀田プロデューサーから、サプライブがあるって言われたけど、まさかこれとはね。顔合わせの後、ちよつと時間があつたから、話しかけてみた。

「よおーだりーー!」

缶コーヒーを投げ渡してやる。

「わわっ! なつきち!」

おお…ナイスキャッチ。

「まさか、前座がだりー達だったとはなくビックリしたぜ」

茂場プロデューサーの差し金かな? だとしたら感謝しないとな。

「どお? 驚いたでしょ!?! こうやって一流のバンドの前座で経験を積む…! まさに駆け出しのロックバンドって感じだね!」

アタシたちが一流…一流なのか?

いや…だりーや、もしかしたらファンの皆にはもう、一流のロックバンドに見られるのかな。

だとしたら嬉しいな。

いや：一応アタシたちアイドルだけど。

まあいつか！今更だな！

「ハハッ！じゃ、頑張れよ：期待してるぜ」

やっぱり、応援されると勇気が湧いてくる。

自分たちのパフォーマンスで喜んでくれる人がいる限り、アタシはまだ、この仕事を好きになれる。そう思う。

「なつきちー！また一緒にカラオケ行こうね！」

それに、最近は自分が独りになる事を好きになり始めてた気がしていたけど、案外そうでもないかもな。

「おう」

のえる：アンタには、勇気を与えてくれる友人がいるのかい？

アタシは：アンタに勇気を与えているのかい？

というかそれ以前に：友人と思ってるのかね。

ああ、あ、どうしたもんかな。

「…ん？ああ、茂場さん…」

考え事しながら歩くもんじゃないね。

あぶないあぶない。

「…え？ああいや、ちよつと悩み事があってね…大した事じゃないんだけど…」

にしても茂場さんとうこうして話すのは、だいぶ久しぶりだな。まあ同じアイドル部門の人だけど、アタシたちの担当じゃないし、当たり前か。

「……聞いてくれるんならありがたいけどね…ちよつと長くなるけどいいかい？……」

まあ、そこまで言うならありがたく…」

なんか気を遣わせちやつたかなあ。

「…てなわけだね。………はあ!?!…いやそんな事したらアタシぶっ飛ば

されちまうよ！…ええ…」

うわあ…ちよつと相談したら、とんでもねえ提案されちまった。

いや、でも当たって砕けろだ！

「分かった分かった…やってみるよ……」

てか、茂場さんってあんなキャラなんだ…

やつぱプロデューサーってみんなどつかヤバい人達なのか…？

幸運：いや、これはもう運で掴み取ったモノじゃない。

俺たちの実力で勝ち取ったモノだ。

クソイベントのバンドルアワードで審査員をやったあのオッサン、高井がビッグ・チャンスを持つてきた。

あの野郎は、サニミュージックレコード S M R のスカウトだった。

詳しい話はごちゃごちゃしているから割愛するが、よーするにあの野郎は偉い奴で、

俺たちのレーベルが日本という世界から見ればインディーな会社から、三大レコードの傘下という、海外への絶大なアドバンテージを得られる会社にならなかつただけだ。

このレーベルで販売されたシングルやアルバムは、もちろん海外でも流通される事になる。

ネットでしか海外に広まっていかなかった俺たちの曲が、世界中のCDショップにも出回るといふ事だ。

まさにビッグ・チャンス。

俺のアメリカでのロックンロール・ライフが、より鮮明に見えてきた。

曲を書いて、ライヴして、レコーディングして、テレビで歌って、また曲を書いて。

これを繰り返していれば、いつか必ず世界の頂点に辿り着く。

そう考えたら、情熱が漲ってくる。

ある日、いつもの様にスタジオで練習していると、休憩中に夏樹が話しかけてきた。

「なあ……ちよつといいか?」

俺は、メンバーとは普段、話したりしない。ちよつと前に、遊びに連れて行かれたことがあったが、まあ俺が途中で勝手にバックレたら、それ以降はあんまり誘われなくなった、最近は休憩中の雑談もあんまりしなかつたから、今日の様な日は珍しい。

ライラと星花はハラハラした顔をしている。別に取って食ったりはしねえーっての。

「なんだよ?」

夏樹はいつになくモジモジしやがっていてキモい。世の男性諸君はこの動作を見てキウンと来るのかもしれないが、俺から見ればこれにギャップ萌えは感じない。

「その…今度、『Star Beats』がさ、次のアタシたちのシングルと同じ日に初シングル出すだろ?もし、あの子達の方が売り上げが良かったら

てのはどうだ?」

…は?

「……………殺すぞ」

俺を舐めてんのか?

どうやら夏樹はマジに殺されたいみたいだ。

「こ、怖いのか?負けるのが」

上等だ。

「…今やってる曲は、全部ボツだ。明日までに新しい曲を書いてくる」

「え!?!」

ふんつ、最近はやんなジャンルを開拓してたせいで、俺の魂が不完全燃焼だったんだ。この際バリバリのロックをあのカソガキ共に見せつけてやるぜ。

「お前ら、次のレコーディングまでに出来る様になつとけ、もし出来なかつたら…」

「で、出来なかったら…?」

「生き埋めにする」

どうせならメディアにも公表してやるよ！そんであいつらクソガキに思い知らせてやる！

「お、おいそれはよせっ!」

「ああ!?!俺が負けると思ってたのか!?!」

『夢見のえるがまさかの爆弾発言!?! 次のシングルの売り上げが S t a r B e a t s を下回れば、歌番組でお願いシンデレラを熱唱すると宣言』

毎週土曜日の夕方にやっている音楽番組『POP & amp; ROCK ON』
様々なジャンルのアーティストたちが、一堂に集まるこの番組は、
新進気鋭な若手から、大ベテランまで出演する。

今回出演したGreen・Rainは、バンドアイドル。

アイドルとは思えぬ激しい演奏が魅力ですが、今日は実はアイドルらしい一面がある
という事をアピールしてくれる様です。

ご覧ください、このフリフリの衣装。

彼女は夢見のえるさん(26)

このバンドで作詞作曲と、リードギターを務めている、まさにGreen・Rain
の屋台骨。

しかし、アイドルらしい姿を見せるのは、今日が初！
どんなパフォーマンスを見せてくれるのでしょうか？
それでは歌っていただきましょう。

夢見のえるで、『お願いシンデレラ』

なあ、N I L， V A N Eのドナルド・コバックス。

お前の、『Smell』がシアトルの若者に大流行して、メディアのオモチャにされて辛かった時の気持ち、今なら分かるよ。

あの時はお前のことクソって言って悪かったな。

どうせお前地獄にいるんだろ？

俺と組まねえか？

俺もたぶん地獄行きだからよ。

俺たちが組んだら最強だぜ。きつと最高の曲を作れる。

だからよ……………

「離せクソ茂場アーツ！俺は飛び降りなきやならねえんだアア!!」

ああ…クソ…マジでヤクが欲しい…

第十八話

『D, You Understand?』はGreen・Rainが発表した楽曲、及び同曲を収録したシングル。通算7枚目のシングルである。

『D, You Understand?』

Green・Rainのシングル

リリース 2020年12月21日

ジャンル ロック

レーベル SMR

時間 7分22秒

プロデュース 夢見のえる、亀田悠真

収録曲

1. D, You Understand?

2. Stay With Us

3. Angel of a Child

4. Falling Snow

夢見のえるの作詞・作曲。ボーカルは夢見りあむ。通算3枚目のオリジナル・アルバム『There Right Now』から最初のシングル・カットである。同アルバムでも1曲目に収録されており、アルバムを代表する曲である。シングル・バージョンはイントロのヘリコプターのSEがないため、アルバム・バージョンよりも約15秒短い。

始終『Get With It』の流れを汲むギター、ドラム、シンセサイザーなどのリフを聴くことができる。

夢見のえるはソングライティングに関して次のような発言をしたことがある。

「素晴らしいシングルだって？ それは全てメロディにかかっている。どんなに上手くプロデュースされるかではないし、歌詞が良いかでもない、誰が最高のギターを弾けるかでもない。もし人々の心に響くなら、それが良い歌なんだよ」

『夢見りあむへの37の質問』

今回は、新進気鋭のアイドルにしてロックスター、夢見りあむ。

彼女の哲学と、アイドルへの愛について、37の質問を投げかけた。

Q1：最近の調子は？

A：最高だね、喉以外は

Q2：最近気になることは？

A：シチズン（地下アイドル）

Q3：現場参戦は最近どう？

A：なかなかできない、マジやむ

Q4：別人になるなら誰に？

A：顔のいいアイドルなら誰でも

Q5：人生で一番好きな映画は？

A：「青春の光りは我にあり」

Q6：変な恐怖症はある？

A : レッスン恐怖症

Q 7 : 今までで一番の贈り物は？

A : お姉ちゃんから貰ったギター

Q 8 : 人生におけるモットーは？

A : 楽をしながらチャホヤされたい

Q 9 : 何時間でも語れるテーマは？

A : アイドル

Q 10 : お酒は何を飲む？

A : 何でも : ビールでもウイスキーでも

Q 11 : 紅茶の飲み方は？

A : 牛乳と砂糖をたっぷり

Q 12 : 自分を動物に例えると？

A : 怠けがちな犬

Q 13 : 音楽に夢中になったのはいつ？

A : 19 から

Q 14 : お気に入りの歌詞は？

A : 「Out of control so give up」

Q 15 : 好きな曲のトップ5を決めるなら？

A : 全部いい曲だからむり

Q 16 : タンバリンを2千個持つてるのは？

A : 誰？そんなの言つたの。にわかかな？

Q 17 : 好きなタバコは？

A : メキシカンスピリットの青か緑

Q 18 : もし、自由にバンドを組めるなら？

A : お姉ちゃん以外なら誰とでも組める

Q 19 : 歌って踊りたい？

A : 踊りたいけどレッスンがめんどくさい

Q 20 : 過小評価されてるアイドルは？

A : シチズン

Q 21 : 過大評価されてるアイドルは？

A : ああくなんだっけ、やたら数多いところ

Q 22 : 湊坂64？

A : そう、そいつら

Q 23 : メディアは怖くない？

A：ホラ吹き共は怖くない

Q24：ファンからの悪口は？

A：この世のなによりも怖い

Q25：母親から学んだことは？

A：格下にはマウントをとれ

Q26：本当にそう言われたの？

A：言われてない、でも態度から学んだ

Q27：アイドルは楽しい？

A：今のぼくはアイドルじゃない

Q28：りあむさんはロッカー？

A：ロッカーでもない、ぼくはぼく

Q29：よく聴く音楽のジャンルは？

A：もっぱらアイドルソング

Q30：好きなタイプの男性は？

A：金持ち高身長イケメンアイドル

Q31：何の車を買った？

A：「SMALL type IV」ハイブリッド車だよ

Q 3 2 : 好きな食べ物は？

A : 餃子

Q 3 3 : ギターはできる？

A : ちよつとだけなら

Q 3 4 : こつそり楽しんでることは？

A : 大麻 : ウソだよ、もちろん

Q 3 5 : ファッションのお手本は？

A : 星井美希ちゃん

Q 3 6 : ライブ前に必ずすることは？

A : 一服しながら歌詞カードを見ることが最後の質問になる。

質問 3 7 だ。

Q 3 7 : 連想ゲームをしませんか？

A : いいよ

では開始だ。

イ : 夢見のえる

り : 鬼、悪魔、外道

イ：346プロ

り：神

イ：このインタビュー

り：思いつかない、ぼくの負けでいいよ

(イ↓インタビューア、り↓りあむ)

アメリカに行ったバンドは大体暴走する。
何もかもが桁違いだからだ。

身の回りにある、あらゆるモノが違う。
もっとビッグだ。

だからコントロールを失うのだろう。

『Not the Plan』は、Green・Rain初の裏ベスト・アルバムで、シングルのB面をファン投票と夢見のえるによって選曲された。

『Not the Plan』

Green・Rainのコンピレーション・アルバム

リリース

2020年12月27日

録音

2019年 — 2020年

ジャンル

オルタナティブロック

時間

57分28秒

レーベル

SMR

プロデュース

夢見のえる、亀田悠真、真島俊

収録曲

1. Abid

シングル「Super High Speed」収録。

Aメロをのえるが、サビをりあむがボーカルを担当する構成となっている。夢見姉妹が共にリードボーカルをとった最初の曲である。のえる曰く、当初はりあむが全てのパートを担当する予定だったが、レコーディングの直前になってりあむが喉の不調を訴えた（あるいは低音が出なかった）から、とのこと。

2. Queen of Rock, N' Roll

シングル「Super High Speed」収録。

夢見のえるが初めて書いた曲と言われており、デモテープにはのえるの声とアコースティックギターの演奏しか収録されていなかった。

3. A Slight Rain Falling Now

シングル「Boiler Maker」収録。

後のベスト盤『Kill The Clock』にも収録された、のえるのアコースティック・ナンバー。

4. The Oasis

シングル「Boiler Maker」収録。

りあむがボーカルをとるロックナンバー。

5. Ashtray & Chaser

シングル「Life Forever」および英国盤CD「Queen of Rock 'N' Roll」収録。

6. Rolling Glory

シングル「Life Forever」収録。

後にアメリカのCMソングに起用され、海外の知名度向上に一役買う曲。

7. Thunder Shock

シングル「Green Submarine」収録。

シングル・バージョンより、アウトロが1分ほど早くフェイドアウトする。

8. Red Rum

シングル「Standing Middle Finger」収録。

シングル・バージョンのものより、間奏のギター・ソロが15秒ほどカットされている。

9. Hurricane Ride

シングル「Standing Middle Finger」収録。

10. Not the Plan

シングル「Get with it」収録。

ベスト盤『Kill The Clock』にも収録された、のえるがメインボーカルをとるナンバー。ベスト盤発売に合わせて制作されたミュージック・ビデオでは、5人のメンバーが日本の漫画家である、水島おさむスタイルのアニメーションで登場する。